



オアシスの風と嵐

古川久雄*

2003年2月下旬から3月上旬まで2週間、パキスタン、アフガニスタン、タイを訪れた。山田勇氏の「環ヒマラヤ広域圏における生態資源利用の比較研究」のメンバーとして、大東文化大学の原隆一氏と同行した。主な目的はアフガニスタンの農地と町、村、それにタリバン時代や米・英の戦争の影響を見ようということである。アフガニスタンは1週間の駆け足旅行で、ほんの上っ面を見たに過ぎないが、戦禍の悲しみを消すことができないオアシスの人々の様子を伝えたく、日記形式で報告する。

イスラマバード (Islamabad) からカーブル (Kabul)

2003年2月26日

24日は夜遅くラホールに着き、予約もないまま、タクシーの運転手にうまくはめられて、場末の安宿に高値で放りこまれたが、昨日着いたイスラマバードは、安野君（元熱帯農学の学生で、今はここの日本大使館でアフガン難民支援の仕事をしている）がニッパ・トラヴェルのゲストハウスを手配してくれていた。この会社を切り回しているのは、督永忠子さんという私と同年輩のチャキチャキおばさんで、もともと、山歩きが嵩じて21年このかたパキスタンに住み着き、今は2階建ての立派なゲストハウスを経営し、カーブルに支店もある。その車で、昨日はタキシラのガンダーラ遺跡を1日見学、今日はパンジャブ（五つの河）のひとつジェルム河の扇頂部に作られたラスル（Rasul）パラージュとパンジャブ平原の風景を見て戻り、その足でアフガニスタン大使館へ行って、ヴィザを手に入れ、今、ゲストハウスのサロンで一休みである。

2日間の見学でパンジャブ平原の立地は凡そ見当がついた。ペシャワール（Peshawar）、タキシラ、ラウルピンディなど、ガンダーラ文化の栄えた上流部はポトワール台地というレス台地である。台地の南端にはSalt Rangeという岩塩の山地があり、その南裾をジェルム河が洗い、それより下流部はパンジャブ平野となる。ポトワール台地のレス地帯は天水の秋蒔き小麦地帯で、広がりはいささだが、古い時代に特徴のある文化圏が生まれ易い立地である。他方、パンジャブ平野はインダス、ジェルム、チェナブ、ラヴィ、サトレジなどパンジャブの河川灌漑水をうけた肥沃な大平原で、作物の種類も作季も多様であり、大帝国の生まれる立地である。中国と比較すると、ポトワール台地はオールドスや関中のレス地帯に相当し、パンジャブ平野は黄河の乱流する華北平原に当たる。

こんな話を督永さんと3人でしていると、明日カーブルへ飛ぶ三つの日本人グループのうちのひとつ、トータル・ロジスチックをやるという会社の二人が話に加わった。アフガニスタンはどちらへと聞いて、その話に感嘆した。原さんと私は、時間も短いから、カーブルと、その南130キロメートルのガズニ、北へ100キロメートルのサラン峠と南北に動き、帰路は陸路を東へ、ジャララバード（Jalalabad）、カイバー峠を越えてイスラマバードへ戻る予定だった。ガズニ（Ghazni）から南は治安もまだ良くないし、宿も難しいというので、比較的安全な地域に限定したのだ。ところが、トータル・ロジスチックの二人はガズニから南、西アフガニスタンをカンダハル（Kandahar）、ヘラート（Herat）と回り、ヘラートからイランへ入り、ヨルダンへ飛んで、陸路、砂漠道路をイラクへ入ると言う。イラクは米軍の攻撃が多分始まるだろうというのに、入れるのだろうか。ヴィザは、と聞くと、ない、しかし国境でどないかなるもんですと、悠然たるものだ。

* Furukawa Hisao, 京都大学名誉教授；
Emeritus Professor of Kyoto University, 3-5
Yagura-cho, Zushio-ku, Yamashina-ku, Kyoto
607-8452, Japan



地図 アフガニスタン

出所：National Geographic Society

何の仕事ですかと聞くと、石油掘削にかかわるあらゆる物品の納入だそうで、主目的はイラクの石油利権にむらがるメージャーや、ロシア、フランスその他の石油掘削、販売会社に、機械部品、車、パソコン、ソフト、その他なんでも売り込むことだと言う。米軍が攻撃を始めるかどうか、可能性は半々だが、どちらにしてもイラクの石油に米・英・仏・露、EU諸国が干渉を強めるのははっきりしていて、決着が着いてから乗り込むのでは、すでに分配が終わっていて、商売にならない、と言う。今すでにアメリカの石油会社がイラクへ乗り込んで、石油を買いまくっていますわと、経済制裁下の石油禁輸でフセインを締め上げているという表向きの話など、全く嘘のようである。どうして直接イラクへ入らないで、アフガニスタン、イラン、ヨルダンと回り道を？と問うと、今の商売は日本の製品を日本から運ぶといった、暇もカネもかかることはやってられなくて、近くて安い市場がどこか、その知識が決め手だそうだ。その情報収集に回り道をするので、強盗が出ようが、悪路で胃が飛び出ようが、そんなことは言われてられまへん、と見事な覚悟である。

もうひとつのグループはGlobal ExchangeというアメリカのNPOの日本支部の人たちで、こちらは詳しい話を聞けなかったが、督永さんの話では、以前もアフガニスタン行きの経験があり、そこでブッシュの戦争犯罪を検証する調査をやっているとのことだった。もうひとつのグループは原さんと私で、環ヒマラヤ云々とこちらは断然悠々たる目的である。

2月27日

昨夜は雨、一昨晩も雨だった。今年は冬雨の主要期間に降らず、終わりかけに雨が多い変った天候だと督永さんが言う。イスラマバードは雨でも、カーブルでは雪になりますからね、飛行機が飛ばかしら、と言ってニコッと笑って下さる。

ニッパ・トラヴェルのマイクロバスで、変った組み合わせの3グループはともかく飛行場へ向かった。チェックイン・カウンターで原さんがウエイティング・リストに入っていて、待たされる。後でわかったが、パキスタンから帰国するアフガン難民の団がほとんどの座席を占め、少ない空席にパキス

タン商人が割り込んできたのだ。トータル・ロジスティックのベテラン藤原さんが電話でどこかと話を付けて、けりがついた。カーブルへ飛べる。

パキスタン航空のB 737にはすでに帰国難民がいっぱいで、白い民族衣装の男たちがほとんどだが、黒いチャドルの女性も数人いる。帰国の興奮もあるだろうが、通路を進むこちらの席番カードや、私が首にかけた亀のブローチに手を伸ばして見ようしたり、好奇心を抑えられない人たちである。飛び上がると、すぐ厚い雲である。35分ほどで着陸態勢に入る。突然左の窓に鋭い岩稜をむき出しにした雪山が現れ、稜線をかすめるようにカーブル盆地へ入る。黄土色の線が暮盤目に並んでいるのは、泥壁の平屋が広大に広がっているのだ。まもなく着陸した。

機外へ降り立つと、大きなエアバスとアフガンのアリアナ航空の中型機からも、大勢が降り立っている。エアバスは何の標識もない。藤原さんによると、どちらも国連のチャーター機で、難民を運び込んでいる。イラン、パキスタンにいるアフガン難民は300万人に上り、国連が帰国を支援している。難民は一人100ドルを貰ってともかく故国の土を踏む。機外に並ぶ人々は圧倒的に男たちである。難民キャンプの女たちはどうしているのか。長い人の列をぼやっと見てみると、突然鋭い笛が響き、警備員らしき男が誰かに警告している。見ると藤原さんたちが飛行機の周りで盛んに写真を撮っている。やめろということらしい。しかし二人は一向にやめる気配もなく、あちこち動き回って撮り続けている。飛行機、乗降ステップ、荷物車、空港、ターミナルビル、なんでも手当たりしだいである。近寄って来られたので聞くと、どこのどんな製品を使っているか施設はどうか、なんでも商売の種ですわ、と言って今度はエアバスのほうへ急ぐ。それじゃまた、とその背中に叫んで、こちらは大勢の難民にもまれながら、入管手続きをおえて外へ出た。Prof. Haraと書いた紙をもったアフガン人が迎えてくれる。ニッパ・トラヴェルのカーブル支店で働く通訳のラヒムさんである。黒いズボンに黒いジャンパーを羽織り、口ひげが濃い。がっしりした手である。ムジャヒッディンで活躍していたかなとチラッと思いながら、早速マイクロバスに乗り込んだ。

原さんが、大使館へ、と言って、車はカーブルの日本大使館へ向かった。原さんがイラン大使館に専門調査員でいたころの駒野書記官が今アフガニスタン大使、同僚の藤井さんが参事だそうで、まず会いに行きましようと言う。町の中はブロック全体が全壊、半壊だったり、あちこちに屋根に穴があいたり、壁のつぶれた家があるが、全面的な破壊風景ではない。私の脳裏にあるのは、汽車の窓から見た終戦直後の神戸、大阪の、鉄骨がグニャとむき出しになり、元の姿をとどめない町の惨状なのだが、カーブルは鉄骨のビルなどもともと少なく、日干しレンガ積みが多く、レンガが散らばっても、印象が強烈にならないせいだろうか。

駒野大使は今日のご不在です、藤井参事も今席をはずしています、と別の藤井書記官が来られ、全体状況を聞いた。地方の治安状況は、ガズニは危険度5、カーブル、パーミアン(Bamian)、ジャララバード、カンダハル、ヘラートは危険度3、北のサラン峠は雪氷で通過困難ということで、なかなか大変そうである。治安が良くない最大の原因は軍閥が割拠していることで、中央政府が完全に制御している状態ではない。任命した役人が地方に受け入れられず、帰って来ることが結構ある。辺境地域では、反米、親タリバン感情もあり、米軍が掃討作戦を続けている。カンダハルでは、2週間前にも米軍の作戦があった。地方の旅行には、武装兵を護衛に連れ、2台で走る。地雷がたくさん残っていて、国道でも道の上は大丈夫だが、一歩道脇は地雷原のところがあり、赤く塗った石が並ぶなど。

戦争が始まったころ、インターネットで流れる情報では、2000年の大旱魃で数百万人が餓死の危機にあるという話が多かったので、食料の状況を聞く。小麦粉は世界食料計画から供給されている、ブドウ、メロン、スイカ、ザクロなどの果物は土地のものが結構でまわっているし、野菜はパキスタンから大量に入っている。クッチ族の家畜が大量に死んだという話はあるが、人が餓死した話は聞いたことがない。しかし問題は難民が多数帰還してくるこれからで、2002年に200万人が戻ったと言われているが、帰国しても、灌漑施設のカレーズは壊れていて水が引けないし、地雷がカレーズにも畑にも残っていると言われている。カレーズ、井戸を復興し、農業を軌道

に乗せることが大きな課題で、たくさんのNGOが支援に来ている。日本からもベシャワル会、ピース・ウインズ、ソラなどが来ている。

こんな話を聞いていると、原さんの元同僚の藤井さんが戻ってこられて、話を引き継いでもらう。ソ連軍侵攻以前にJICA専門家が撮ったビデオを見ると、カーブルの町は大変きれいだった。中心部を流れるカーブル河の水はきれいだし、雪山に囲まれた高原の町の爽やかさが写真にも良く出ているそうである。しかしソ連軍の侵攻があり、その後もムジャヒッディンのリーダー間の権力闘争で、破壊が進んだし、治安も悪化した。これは外部勢力が介入したからで、以前は、貧しくてろくな武器もなかったのだが、ロシア、アメリカ、パキスタンなどが与えた武器で、軍閥の軍備が増大した。その後、タリバンの出現で治安は劇的に良くなった。ただし、タリバンもシア派のハザラ族を粛清したり、問題はあった。米・英軍がタリバンを追い払ったが、結局、タリバン以前の状況に戻っただけで、地方では、タリバン以前の顔ぶれが戻って来た。状況は簡単じゃないと仰る。ともかく旅行は気をつけて下さいよと忠告を受けて、別れた。

ラヒムさんが見つけてくれたASSAゲストハウスへ行く。町の東北部、シャフリナウ公園の北側にある住宅街の一角で、高い塀囲いを入ると、25メートルプールがあるが、今は空っぽである。家は2階建ての平屋根で、悪くはない。ナジブラ政権の將軍だった人の持ち家で、今は息子が継いでいる。FAO、UNESCOなど国連関係、それに、様々なNGOやヴォランティアの外国人が20人ばかり下宿している。シャワーを浴びて小さな食堂へ行った。FAOで働いているというドイツ人がぶどう酒をご馳走してくれる。何をしにとの問いに、原さんがツーリストだよと返事をすると、みんないっせいに驚いたという顔を向ける。カーブルにツーリストが来るのかと誰かが言い、あとは顔を振って、皿に向かっていた。

夕食後は横のソファのある部屋に移る。テレビがあり、BBC放送がイラクの査察をめぐる動きを伝えている。みんな黙りこくってじっと見ている。

2月28日

朝、ラヒムさんがマイクロバスで迎えに来て、ニッパ・トラヴェルのカーブル事務所へ向かう。事務所は町の西部、ハザラ族地区にある。街中は壊れた家が点々とある。米・英軍の爆撃かと思うとそうではなくて、その前の軍閥間の戦闘のためだと言う。カーブルの町中には100メートルほどの山がいくつもあり、別々の軍閥が陣取っていた。西にはヘクマティアル、ドスタム、東にマスードの陣地があり、互いに砲撃を交わした。その砲撃で潰れた家が多く、とくにハザラ族の地区は大きな被害を受けたと言う。

事務所に着いて、そこを預かっている川村夫妻と会う。塀の中には広い空き地があり、トヨタのランドクルーザーが2台並んでいる。今のカーブルでこの車の維持は大変だと言う。カーペットを敷いた居間は薪ストーブで暖をとっていて、ラヒムさんも加わって座り込み、話を聞く。この事務所はニッパ・トラヴェルの事務所だが、同時に、督永さんたちがやっているNGOアフガン難民を支える会（SORA）の事務所をも兼ねる。その話はイスラマバードで督永さんから聞いた。いきさつはもうひとつ良くわからないのだが、この会は日本のJR総連と督永さんが作ったところがある。彼女に言わせると、このごろの労組は賃上げとか経済的トピックだけでは人が集まらず、SORAのような旗印をあげることが必要なのだそうだ。そして、彼女が目をつけたのはアフガニスタンでもっとも冷遇されているハザラ族の支援である。ハザラはモンゴロイドであることも決心にいささか影響している話し振りでもあった。

具体的な事業はバーミアンの南にあるハザラ地区の村で、カレーズの復旧、建設と、水源確保の意味で、植林をやるのだと言う。果樹も交えて苗木はフンザから運ぶ手はずの由である。川村さんの現下の心配はその苗木を受け取り、無事に現地へ届けることのようなのである。川村さんの経歴は変っていて、講談社に少し勤めていたが、91年の夏に退社し、アフガニスタンへ来て、放浪中にパシュトゥン語とダリー語をマスターし、SORAで働くことになったようだ。将来は、アフガニスタンの歴史を踏まえた、学者的ジャーナリストになりたいそうである。夢があっていい。夢だけでなく、分野と地域が定まって

おり、冬のカーブルでカーベットの敷いているとはいえ、セメント床の上に寝て、いわば臥薪嘗胆の苦節を耐えている。食費はどれぐらいか聞くと、一日70アフガニーおよそ150円と安い。薪代が結構高く、7キロ1束が26アフガニーで、炊事と暖房に薪を欠かせないカーブルでは、この出費が大きいそうだ。奥さんの淳子さんはまだ20歳代だろうが、屈託がなく、包容力があり、まことに愛らしい女性である。夫の夢を理解し、屈託なくアフガンの生活に入り込んでいる。女の部屋には夫の兄弟といえども入れないパシュトゥン族との付き合いに、夫婦がらみで取り組む面白さが、自然に判っている風である。

ラヒムさんは30歳代半ばで、もとはやはり10歳代からムジャヒディンとしてソ連軍と戦っていたそうだが、タリバン時代にパキスタンへ出て、あちこちの露天市でカーベットの店を開いているときに、たまたま督永さんと知り合い、引き抜かれてニッパの通訳になり、SORAの仕事を手伝っている。仕事は子供を集めてカーベットの織ることだが、その子供たちに字を教える学校もやっている。カーベット工場の社長さんで、同時に識字学校の校長さんでもある。

町を案内しましょうと誘われて、塙の外へ出る。カーブルの町はパシュトゥン、ハザラ、タジクの3大部族が住み分けており、このあたりはハザラの居住地区である。軍閥戦争の時代に手ひどくやられた地区で、事務所の周りも壊れた家がたくさんある。穴の開いた泥道も普通だ。すぐ前で道脇に薪を積み上げて売っている。14キロの石を錘にした天秤で量り売りだ。どんぐりの類と松の薪だと言う。ミカン、ブドウなどの果物屋も並んでいる。横丁に入ると、ごみがあふれていて、USAと印刷した星条旗のストライプ模様の大きなジュース缶や、ざったなごみが散らばっている。缶は米軍からできたものらしい。ハザラの老人がそれを集めている。

まず、インターコンチネンタルホテルへ連れて行かれた。今朝、ホテルの入り口付近で、米・英軍の兵隊が数人殺されたという情報が入ったと言う。これは唯一の高級ホテルで、バゲバラ山の北側にある。事件は2時間ほど前だったのだが、着いてみると、何事もなかったように落ち着いている。誰もいないし、ことがことだけにホテルに入って尋ねるわけに

もいかない。川村さんは、こうなんです、殺人があってもすぐ平静に戻る、平静に見えてどこで殺人が起こるか判らない、そういう状況にあるんです、と力説する。情報は確からしい。

カーブルの印象は一言で言うと、強風に吹きさらされている巨大な難民キャンプである。崩れて散らばったレンガや土壁、それを踏み越える車はゴトゴトと跳ね、砕けた土埃が風に舞ってほこりっぽい。乱雑に捨て置かれたゴミは、乱雑さを気にかける余裕もない気持ちをそのまま表している。巨大な力に翻弄されてふるさとから引き離され、落ち着いた生き方、風土を見失い、神経系統を傷つけられた生き物のように、ちぐはぐな動作を自らがいぶかしげに思うのだが、やり場のない悲しみと怒りと不安に耐えるしかない。そんな印象である。

長らく続いた戦争が社会に刻み込んだ爪あととは簡単に消えないのだろう。そういう理解の仕方はしかし大雑把過ぎるかもしれない。ソ連軍との戦争、軍閥間の戦争、タリバンイスラム政権と軍閥の戦争、米・英のアフガン戦争、それぞれが刻み込んだ影響は同じではないだろう。北から征服者が侵入してくることは、アフガニスタンの歴史の言わば常態であり、それと戦うことはアフガニスタンをむしろまとまらせるように働いてきたと思える。軍閥間の抗争は抵抗のばねを強めた側面もあっただろう。イスラムと土着文化の齟齬は対立と融合の中で、独自文化を生み出す契機でもあったろう。これらの戦争、抗争、対立は一続きの大地の上でアフガニスタンの空間を独自なものにしてきた過程に他ならない。中央アジアの歴史は、割拠した勢力の抗争、連合で作られてきたのだ。アフガニスタンの現在の悲劇は、アルカイダと米・英軍という言わばよそ者グループが介入してきたことにある。しかしこの二つのグループも歴史的に見ると、一くくりにはいできない。アラビア半島からのイスラム原理主義の移入は、大きな歴史のうねりの中にある。マスコミはタリバンのイスラム原理主義の傾向をとらえてアルカイダと同列に描くが、これはアフガン戦争がイスラム原理主義＝テロリストと民主主義世界の戦争だというアメリカの宣伝に、うまくのせられている印象を受ける。9.11事件やアフガン戦争は宗教や民主主義の対立ではない。それはテロリスト集団間の対立抗争だと

というのが、チョムスキーの意見だが、正解かもしれない。アフガンの悲劇はその抗争の場に選ばれたことだろう。先走るとよくないが、岩山の急斜面に張り付いた密集集落を見ながら、そんなことを思った。

本屋やみやげ物屋が並ぶチキン・ストリートへ行く。みやげ物屋にはさすがに本場のラピスラズリ製品が多い。絨毯、剣、緑釉、三彩の陶器、すごいものでは雪豹の毛皮、その他はガラクタが並べられている。本屋には英語・ダリー語、英語・パシュトゥン語などの辞書が積んであり、アメリカ人がドル札で、買い叩いている。原さんはイスラマバードで買い損ねた Dupree の *An Historical Guide to Afghanistan* を買う。ドルの換金も銀行よりレートが良い。ぶらぶら歩いていると、トータル・ロジスティックの藤原さんたちに会った。もう少しカーブルにいてから出かけますということで、彼らが何を見て歩くのか付いて行きたい気持ちはやまやまだったが、お気をつけてと別れた。

近くの結構立派なレストランで昼食後、カーブル中心部の公立公園橋市場へ出かけた。さすがに人が多い。ブルカや衣類の店が並ぶ市場通りはインドの町のように、ごった返している。悪臭を放つカーブル河の中まで露天でテント掛けの絨毯屋が並び、絨毯が広場を吹き抜ける風ではためいている。女性はほとんどがライト・ブルーか黒のブルカをスッポリ被り、細かいレース地の奥にたまに目が見えたり、ハイヒールのヒールが見える程度である。黒いラシヤ地のブルカを被っている女性は目だけ出しているが、これは学生や教育を受けた女性であるとラヒムさんが説明する。女性のブルカはイスラムの女性蔑視を象徴するもののように宣伝されるが、この細か



写真1 市場通りはブルカ姿の女性が闊歩している。

いレスの粉が飛ぶ環境では、被るのが当たり前だろう。テレビのコマーシャルで裸に近い女性を登場させる西側のほうが、もっと露骨に、功利的に女性蔑視を行っている。そんなことはたいしたことじゃないと言うなら、ブルカ非難も止めればいい。

昨日会えなかった駒野大使の公邸へ送ってもらう。入り口は銃を抱えた多分 ISAF (国際治安支援軍) の兵士 5, 6 人が固めている。大使も原さんも、お久しぶりですと懐かしそうで、打ち解けた話が始まる。少し古いが、守屋和郎の『アフガニスタン』(岡倉書房, 1941), それに、最近 UNEP のチームが 3 カ月ばかりで作った *Afghanistan: Post-Conflict Environmental Assessment* (Nairobi: UNEP, 2003) を教えてもらう。アフガニスタン支援の話になり、これからの役割分担が大体決まってきたようで、アメリカはアフガン国軍の建設に当たり、ほかに経済支援、インフラ整備、司法整備などをドイツ、フランス、イタリアといったヨーロッパ勢が担当し、日本は軍閥の武装解除・動員解除を受け持つようだ。日本に振り当てられた役割は大変だなと、私は思った。支援の基本理念は緒方プランというのがあり、緊急支援と通常支援のギャップをなくす、つまり、難民支援と難民受け入れ地域の community development を合体して進めることになっているそうで、これはよくわかる話だ。戦後ベトナムの新経済区は同じ考え方だと思うが、ベトナムの場合、キン族と少数民族の生活習慣、生業の違いがあって、地方に行くと、あまり爆発はしないが、紛糾があることは私も見ている。アフガニスタンではどうなるだろうか。もうひとつの大きな課題は国会開設だそうで、緊急ロヤジルガで憲法を作る合意はできたのだが、国会開設となると、これは大変難しいようだ。例えば、各州から議員を出すとすると、ハザラの場合、全体の人口は多いのだが、広く散らばっているので、代表議員を確保し難い。そういったアンバランスが多々あるので、議員選出法が決まらないのだそうである。

話の途中で、アメリカのプリンストン大学の紛争解決研究センター(だったと思うが、名刺をなくしてしまって自信がない)のスタッフ二人が大使に面会を求めてきて、やはり、日本のこれからの役割である武装・武器解除をどう受け止めますかといったインタビューに同席した。インタビュワーは、大

変困難な課題ですね、と何度も繰り返していた。言外の含みは日本がそんなことできるのか、やるとして方法があるのか、否定的な言質を引き出したい様子だったが、40分近くねばって引き上げた。潮時で、われわれも辞したが、ラヒムさんの車を待つ間、公邸ガードの兵士と話をした。彼らによると、タリバンがカザフにあるアフガン大使館に寄せたメッセージで、米国人と日本人にテロを加えると通告したそう。タリバンにヘクマティアルが同調していて、彼は現在の暫定政府の枠組みに不満があり、その再編を目指している。それが日本への警告を生む背景だと教えてくれた。

ASSA ゲストハウスへ戻り、シャワーを浴びて食堂へ行く。一組の新入り夫婦が向かいに座る。夫婦ともイギリスの心理療法師で、アフガニスタン大学の心理学教室へ協力計画を打診してきたと言う。彼らはアフガニスタンに1960年以来関係があり、今回来た背景を話してくれた。タリバンに家族を殺された少年が徒歩でロンドンまでたどり着き、その面倒を見ていたのだそうである。本当だとするとたいした少年だ。もちろん、少年をそれだけの大避難行に駆り立てた、絶望的なトラウマを忘れるわけにはいかない。ともかく、イギリスへ密入国するアフガン難民は2002年末に10万人を越えた、そのトラウマ治療がイギリスのヴォランティアの大きな課題になっているのだそう。この夫婦はアフガニスタンでトラウマ治療をしようとやって来たのである。なるほど、感心した。私などは即物的な支援だけを考えがちだが、心の問題があるということ、それに、心の問題に取り組むことはいろんな分野に関係が広がっていくことがらで、ヴォランティア活動の重要な分野だと気づかされたのである。食事のあと、横の部屋でテレビを見てみると、BBCでちょうどイギリスにいるアフガン難民が10数万人に達し、大きな問題になっていると報道している。例の夫婦が、そうだろうというふうに、ウインクをよこした。

部屋に戻って、ストーブに火をつけ、雷鳴を聞きながら寝た。

カーブルからガズニ

3月1日

今日からいよいよ地方へ出かける。今日はカーブルの南約130キロメートルのガズニまで行く予定だ。危険度5とか、地雷原に気をつけるとか、いろいろおどかされたので、不安がないことはない。ニッパのマイクロバスに乗り込む。ラヒムさん、運転手、原さん、私の四人である。今日は快晴だ。

まだ町の中だが、バゲバラ山で最初のストップをした。急斜面に張り付くオールド・カーブルの集落を見たかった。バルワン地区といい、マスードの陣地があった山だ。斜面の腹を巻く泥道をゆるく上がって行くと、失対事業で側溝を作っている。溝を掘って、石灰岩の切石を積み、セメントで固める作業を50人ほどでやっている。Shelter NowというドイツのNGOが支援しているそう。四つ辻を右折し、急斜面を上へ行く。上のほうはまだ側溝がない。真新しい水道栓の立ち上がった水場があり、3時から8時までの時間給水だそう。先ほどから異臭に気が付いていたが、原因がわかった。斜面に立つ家の地際、トイレの汲み取り口からあふれ出た汚物が道を流れている。側溝を作るわけだ。しかし末端はどうするのだろう。これは大変なことだと気が付いた。カーブルの人口は帰還難民が流入して、500万人とも800万人とも言われるが、一人年間の排泄物が1立方メートルとして、500万人でも500万立方メートルのおわいに町は溺れてしまう。これは誇張としても、50万トンほどは処理が要るだろう。側溝作りの人々に、ムンデナバシュ、お疲れさん、と別れる。



写真2 岩山の斜面に張り付いた旧市街は側溝作りでごったがえしている。ナンを抱えた少年。



写真3 カブルの町を外れると、オアシスの小区画灌漑畑が広がる。必要な農具は中国でいう耒（左）と耜（右）

町の西郊には露天の食料品市場が延びる。野菜、果物、香辛料、道端で解体した羊肉と、ものは結構ある。さらに西には石材、木材屋が続く。建築ラッシュである。レスを版築して長い土壁を方形にめぐらし、家はレンガを積み、モルタルを塗った平屋根の1階家が多い。柱と梁はプラタナスの丸太を使う。田舎の水路や畑道にたくさん植わっているそうだ。止まって聞くと、直径25センチ、長さ5メートルの丸太で800アフガニーと結構高い。

カブル盆地は高度1,800メートルで、西郊を外れると、雪山がすぐ目の前に迫る。道はレス台地をゆるく上がり、冬小麦が芽吹いた畑も少しある。踏み鋤で何かやっている農夫がいるので止まって見る。細い水路から枝水路で畑へ水を引き、これから春蒔きの麦を蒔くのだ。畑は低い畦で3-4平方メートルに小さく区画されている。今年麦を蒔いた畑は来年ジャガイモ、玉ねぎ、大根などを植えると言う。細い水路の水はカレーズから来る。ここアルガンデ村は14本のカレーズがあったが、戦争中につぶれ、水が出るのは今3本だけである。自分の畑に水を引けるのは15日に一回で、その時、8時間水を引く権利をもっている由である。この農夫は25ヘクタールの畑があり、カレーズだけでは水不足なので、深井戸も掘った。

この農夫が使っている鋤はシャベルの上に足踏み台をつけた踏み鋤である。古代中国で耒というもの

にあたる。足踏み台のない方を耒といい、これは弥生の櫛型鋤である。オアシス農業で是非要る道具は水回しに使うこうした長柄の鋤と、収穫用の鎌ぐらいである。耜が必須になるのはオアシスよりも少し雨の多いところになる。

脇の屋敷地は大きな塙で囲まれている。中に口バ、牛、ヤギ、羊を飼っているというので、見せてくれますかと、入り口の方へ歩きかけるが、きたないから入らないでと、止められる。気にしませんよ、とさらに行き掛けると、女たちもいるし、どうしても屋敷地内へ入れたくない様子である。何か事情があるようなので、無理強いはい止め、礼を言って出発する。

5分走ると、山も畑も一面雪景色になる。このあたりの山頂は高さ4,500メートル前後、道は2,000メートルぐらいに行く。UNHCRのチェックポイントがあり、右前方へ延びる谷から先ほどのカレーズが来ているというので、枝道に入る。入り口に一群の白旗がはためく一角がある。シャヒドといい、戦死者の墓である。ラヒムさんを先頭に川原に行く。カレーズの水路だという細い小川に当たる。きれいな水がサラサラ流れ、クレソンが生えている。一株むしって食う。辛味が利いて旨い。500メートルばかり北西で、村に出る。上アルガンデ村のカレイシディック地区である。村の崖下で、水路が枝分かれしてはトンネルの中に消える。カレーズ出口だ。本線を少し行くとまた枝分かれます。要するに、何本かのカレーズ水路が枝状に集まって、先ほどの細い小川の水流を養っている。村人がやって来て、塞き上げたところを指し、ここには水車をかけていたんだと言う。カレーズの母井戸はどこか判らないが、地下水路はずっと上流へ続いているというので、さら



写真4 戦死者の墓シャヒド。村には必ずある。

に500メートルほど、谷を行く。レス台地の上にまだ植えていない畑がゆるい棚田のように広がり、所々、深くぼみがある。カレズの縦井戸（サレチャ）がつぶれた跡である。何本ものカレズが北の山裾からレスの地下を走っているらしい。レス台地の端っこには、地下水路が地上に出てくる出口（ダーネ・カレズ）がある。こうやって入って中を掃除するんだと、一人の村人が40センチ四方ほどの小さい入り口から潜り込んで消え、しばらくして出てくる。5、6メートル進むと広くなるそう。トンネルは石ころがあるか、土ばかりかと訊くと、土ばかりだと言う。

カレズの母井戸（サルチェシマ）は現地表の川原に相当する礫層の滞水層を掘り当て、地下水路（スフ・カレズ）はその上のレスの中を掘り進むと推定できる。戦乱で長らく地下水路を掃除していないから、落下土でトンネルが詰まって、水が出てこない。水がないので小麦を植えられないと英語を喋る村人が論理的に説明するので、掃除すればと言うと、金がないと言う。金で掃除するわけじゃあるまいと思うが、現在の状況は良く出ている。

別れて、国道に戻り、進む。もう2時を過ぎていく。日のある内にガズニへ着かないとね、ラヒムさんが念を押す。15分ばかり行って、止まる。兵舎のような平屋で、毛布をかけた入り口を入ると低い座敷になり、壁にもたれて座った男たちが飯を食っている。テーブルなどない。床の一部にツルツとした帯が敷いてあり、その上にナン、玉ねぎスライス、大根スライス、パクチ、ピラフ風の飯などが直接置かれる。皿にもった肉のシチューもある。食後は緑茶も出る。客も給仕もコックもすべて男ばかり、顎髭が濃く、目が大きく、面長の顔が多い。身のこなしはゆっくりとし、柔和な目で見つめ、深々と懐が深い感じである。イラン、アルメニア、トルコの貴公子といった雰囲気がある。原さんがパシュトゥンでしょね、と仰る。シルク・ロード地帯はモンゴロイドとコーカソイドのいろんな混じりがある。ハザラはカザフに似ているが、パシュトゥンとタジクは、コーカソイドの血が強く入っている顔である。

出発は3時を過ぎていく。ラヒムさんが、ノン・ストップで行きましょうと、厳命を下す。やむを得ない。道はヒンドークシ山脈の中の細い谷間を行

く。ごつごつした岩山は今、雪を被っている。谷底はゆるいのぼりくだりがある。モレーンの丘、礫の扇状地と台地、低地と、地形が変わるからである。高度は2,000から、2,200メートルほどである。台地、低地には畑が広がるが、少し高いと雪を被り、低いところは麦の芽立ちも少しある。灌漑水路に水が流れ、ポプラやブラタナスの木が水路沿いに植えられている。果樹園も時々ある。

東の山裾にはかなり密集した集落が続くが、国道沿いはばらばら程度である。家はどれも大きな土塀に囲まれている。高さ5メートル、1辺の長さは大きいものだ。50メートルもあり、中の家は見えない。典型的なパシュトゥンの家だそうで、四隅に望楼が立ち上がったものもあり、まるで城砦である。普通、兄弟の数家族が住み、そこには男の入れない女性だけの部屋があり、女性はブルカを脱いでくつろいでいるが、外へ出るときは、スッポリと被る。督永さんの話では、パシュトゥンの婚資は高く、男は嫁さんを買う意識があり、自分の所有物だと思っている。だから人に安易に見せはしないのだそうである。

日が暮れて、行き会う車もなくなった頃、ガズニ盆地への下り道となる。谷が広がり、土は乾いている。夏は埃がものすごいそうだが、冬は適当に雨があるので、窓を開けて走れる。暗がりの中に大きな塀囲いがぼつぼつと現れ始めた。電灯がないのかと思っているうちに、赤、黄、緑の三原色ネオンをつけたレストランや旅館が道沿いに現れた。町の中には泊まる場所がないという話だったので、水路を越えてすぐ、街道沿いの一軒の宿に入った。一階は煌々と明るい食堂で、テーブルと座敷がある。二階に部屋が10室あり、その一室に原さんと相部屋で泊まる。二段ベッドが壁際に二列並び、間にストーブがある。

食堂へおりて、昼飯と同じような料理を食う。15、6歳の少年二人が飯を運んで来る。きびきびとよく働く。9時には電気が消えるというので、飯が終わると、厚手の毛布2枚を被って早々に寝た。夜中、二階の端のトイレに立つ。室内は真っ暗だが、廊下へ出ると、ローマン・ランプがバヤッと壁を照らしている。



写真5 ガズニの旧城市壁を背にした男。

3月2日

朝、原さんはすでに起きています。昨晚の少年が水路の水をバケツですくっては、店前の土埃を静めている。トイレどうでしたと聞くと、きれいに掃除してくれたようです、というので決心して行く。水槽に水があふれ、便槽もきれいになっている。やれ、有難やである。ナンに朝からシシカバブがつく。ガズニは高度2,190メートル、朝の空気は冷たく澄んでいる。快晴である。

すぐ南に幅5メートルほどのガズニ川が流れ、細い運河が平行している。越えて右折すると町への取り付き道路になる。まだ若いナツメヤシの街路樹がばらばら立っている。泥壁の切れ目を入ると、ガズニの町である。町と言っても、幅10メートル、長さ100メートルほどの土道を挟んで、低い二階層の店が並んだ市場があるだけである。市場を北へ突き抜けて城砦へ行く。四角の城砦は一辺が200メートルばかり、ラクダ色の盆地底から高さ25メートルも日干しレンガを積んだ壁がそびえる。城壁はまっすぐではなく、丸い望楼がいくつも張り出している。イランでよく見るガルエの巨大なものだ。崩れた一角を登って、入ってみた。内部は全体がテル状に高まっている。少し低い広場にポンプが1台ある。テルの上は泥壁で囲った箱のような家がくっつきあって密集集落になっている。壁の間をくねくねと延びる細い道は、時々釣り部屋の下をトンネルで突き抜ける。上の窓から視線が窺う。糞をよけながら、ずっと内部へ行きたいのだが、あまり安全ではありませんので、トラヒムさんに制止され、やむなくすぐ戻る。ボールをけて走り回っていた子供がたくさん集まって来た。われわれの今の常識からするとぼ

ろをまとった子供たちだが、めっぼう明るい。女の子も後ろから好奇心で目を輝かせている。

ガズニは中央アジアの有名なオアシス町のひとつである。この城砦の年代はよく判らないが、城砦も町のたたずまいも中世というより古代のおもむきである。カシュガル、サマルカンド、ブハラ、ヒヴァ、メシェド、イスファハン、ブシェール、ヤッフォといったシルクロードの町と、古さも性格も同じに違いない。そして、その中で、最も簡素で、古代の顔を持っている。現代の物質的基準からは、最も貧しいと言い換えてもいいだろう。しかし、豊かさとか幸福といった事柄は基準がない。定義はできても、比較は難しい。ガズニの泥レンガ家に住む人々が、町の東のタバ・サルダール・テル（7世紀の仏教ストゥーパがある丘）を占拠している国際治安支援軍（ISAF）の兵士と比べて、家や食事、衣服、それに内面の豊かさで、どちらが貧しいか豊かか、比較は難しい。7世紀にガズニを訪れた玄奘法師の記述に次のようにある。「麦が豊富である。草木、花・果は繁茂している。サフランに適し、ヒング草（香辛菜）を産出する。ガズニ城中では湧き水が枝をなして流れ、人々はこの水を利用して田を灌漑している。人の性質は軽率で、心に詐りがおおい。学芸を好み、技術に多能である。よく耳を傾けるけれども道理には暗く、日ごとに数万言の文句を暗誦する」（『大唐西域記』水谷真成訳、平凡社、1971、p.281）。オアシス農業の有様は今も同じだし、人についての形容も変わらないだろうが、アフガンに戦争を仕掛けた豊かな二大国の軽率さ、詐わり、道理の暗さに比べると、はるかに上等だろう。

ガズニは10世紀に興ったガズニ朝の都城だった。中央アジア、西アジアの権力は連合と割拠の繰り返しである。ペルシア帝国、アレクサンダー帝国、ウマイヤ朝、アッバス朝、モンゴル帝国、チムール帝国、オスマン・トルコ帝国の大領域は、統治者の力が衰えると、地方勢力の割拠に戻る。ガズニ朝というのもそうした地方勢力のひとつで、アッバス朝の力が衰え始めた9世紀半ば、今のウズベキスタンのブハラに興ったサーマン朝がトランスオキシアナからアフガニスタン、イラン東部まで勢力を伸ばすが、10世紀半ばにサーマン朝の力が衰えてくると、今度はアフガニスタンからイラン東部をガズニ朝が支

配し、新疆をカラハン朝、ウイグル王国が支配するというように、地方勢力が分立することになった。尤も、地方勢力と言っても、現在のアフガニスタンに割拠する軍閥の支配圏全体よりは大きかったようで、パンジャブへ侵入を繰り返し、そこから奪ってきた富で、ガズニは華麗に飾られた都市だったそう。今は、みすぼらしさを絵に描いたような廃墟であるが、ガズニ朝の成立はアフガニスタンからパンジャブへイスラムを伝える契機となった。

城砦から降りてくると、ジープから銃をもった男たちが降りて来て、誰何する。ISAFの兵士でないことは確かだが、顔立ちは陰険ではない。ラヒムさんが落ち着いて対応し、我われも握手で別れた。城砦のすぐ南に小さな聖者廟がある。墓守の爺さんが一人いて、父も墓守だったのだと、庭の小さな墓石を指した。脇に太いブドウの幹が立っている。

市場を見る。低い二階家が並び、肉、穀類・雑穀、茶、野菜、雑貨、衣類、と品物ごとに店がまとまっている。肉は牛肉が多い。解体したばかりの半身がたくさん吊ってある。1キロ65アフガニー（約140円）と、円にすると日本の20分の1以下である。お茶がいろいろあるのは面白い。紅茶はインドネシア産が、緑茶は中国、ベトナム産が入っている。イランのバンダール・アッバス港から入る。サフランの色粉、ウコンで染めた米、ヒヨコマメ、ダール、インゲンマメ、リョクトウ、岩塩などを見る。岩塩はパキスタンのソールト・レンジ産が来ている。アフガニスタンでは、マジャリシャリフにも産するそう。

町を北へ戻ってしばらく行くと、西の丘裾にミナレットが2本見える。低地も丘も木一本、草むらひとつない土漠の中、ガズニの栄華をかううじてとど



写真6 ガズニの市場の肉屋街。古代的風景の中で、現代を生きている。



写真7 ガズニ北郊に残るソ連軍のタンクや装甲車の残骸。

めるモニュメントである。12世紀初頭と半ばの建立である。もうもうと砂埃を巻き上げて見に行く。高さ20メートルばかり、焼きレンガを積み、塔の断面は8角形だが、各辺は二つ折りにへこんでいるので、塔身には16の面がある。そこに装飾レリーフが施されている。よく似たミナレットはデリーかその近くで、ムガール期のもを見た覚えがある。地雷は大丈夫かなと言いながら、見て回る。

ふと気が付くと、戦車の残骸が10メートルほど脇に転がっている。ラヒムさんに促されて東を見ると、100メートル先に4、50台の残骸がかたまっている。ソ連軍の戦車、装甲車の墓場である。砲身が残るものもある。そこの監視小屋から、銃を吊った兵士がやって来て、お茶を飲んでいかないかと誘ってくれる。どこかの軍閥の兵士だろう。行きたいのはやまやまだし、危険もないだろうと思うが、握手だけで別れた。時間のないのが残念だった。

すでに10時半近い。カーブルへ戻ることにする。半時間ばかり走ると、カレーズの縦井戸塚が一直線に並んでいる。西と北に延びるモレーンの丘裾である。止まって見る。道から南へ土漠を行くと、水を含んだレスカティルの粘土が靴底に雪だるまのようにくっつく。約20メートル間隔で塚が並ぶ。塚の開口部は50センチ四方ほどで、ふた石が用意しており、中を見ると井戸壁は切石で巻いてある。男の子と女の子がお金頂戴とやって来た。聞くと、このカレーズの水はガズニへ引かれ、このあたりはドライ・ファームングで、4月に麦を蒔く。地表にはトラクターで引いた条溝がすずにある。カレーズ列は道から北の方にも、数本走っている。

道は少しずつ上がり、薄く雪を被った低い峠に来

た。2,300メートルくらいだろう。この峠は花崗岩が馬のたてがみ状に露出する低い峠で、雪は少ない。男がとげ草を鎌で刈ってかごに入れている。パン焼きにいいのだそうだ。やがて、東に高山が現れて、山も畑も一面の雪になる。東の山裾に続く村はアヘン商売をやっている連中だと、ラヒムさんが言う。穴ぼこ道をマイクロバスが何台も連なって来る。ハジ帰りの人々だそうだ。

12時過ぎ、雪原の中に新しいポンプ小屋が点なすところまで止まる。タリバン時代に掘った井戸で、深さは35メートルほどらしい。小屋から出てきた男たちが口々に喋るのだが、元ムジャヒッディンで今は警官をしている男たちだそうで、警邏小屋の前で止まったのが失敗だった。農業について聞いても、よく判らない。ともかく、春小麦地帯である。

20分ほど進んで、雪が少なくなったところに村が出てきたので、止まる。大きな土塀に囲まれた典型的なバシュトゥンの家が並んでいる。スモモや杏、リンゴの果樹園があり、まだ花は咲いてないが、のどかな風景である。厚いかいまきを肩にかけた男二人が畑道にいる。聞くと、ハフテシアブ、七つの粉引き水車という名の村である。果樹園の垣沿いにぶらぶら東へ野良道を歩くうしろから、男たちも付いて来る。ラヒムさんが、あっちの家に女性がいるからそれ以上行かないでほしいそうです、と言う。そう言えば昨日もそんなことがあったなと、深く気にもとめず、男たちの畑の方へ戻ることにした。道の西側に例のバシュトゥンスタイルの家がある。5メートルほどの高い土塀で囲まれていて、入り口脇の壁にロバ、牛の餌場が籠のように掘り込まれている。面白い着想だな、と近寄ろうとした。すると、男が子供に何か言いつけ、子供は走って行って入り口の木戸に南京錠をかけた。一瞬キョトンとしたこちらの顔を見て、ラヒムさんが説明してくれる。兄弟3家族が共住していて、その女たちが中にいるのだと。ここでやっと、督永さんの言っていた話が判った。よそ者はおろか、親戚ですらなかなか家に入れない、家の女を他人に見せない、その話である。話は話として聞いていた。実際に体験して、初めて話は現実になる。バシュトゥンと言われる人々が初めて現実感をもって、関心を引く存在となった。しかし今考える暇はないし、気をとりなおして、井戸の方へ畑

の畔を行った。

掘りかけの井戸がある。カレーズではなく、単独の井戸だ。一人が地中に入って掘り、掘りくずを袋に入れて、ロープの先に縛り付ける。もう一人は地上にいて、チャルハという木製のウインチで巻き上げる。地層はどうなっているか聞くと、上5-6メートルはレス、その下に同じぐらいの厚さの円礫層があり、その下はまたレスのようである。20から30メートルを1カ月かけて掘る。5年前、タリバン時代に掘った井戸が少し先にあると言うので、見に行く。ジーゼルエンジンで水を汲み上げ、溜めマスから2本の水路へ流している。しっかりした施設である。ラヒムさんが、このあたりの村はアヘン密輸でもうけているから、その金で機械が買えるのだと、憶測をまた繰り返す。ほんとかと嘘かなんとも判らない。

七つの粉引き水車と楽しそうな名前を持つ村だが、長居はできない。半時間ばかりで発つ。畑は今起こし始めたところで、春蒔き小麦地帯が続く。やがて、モレーンの再堆積地形となり、秋蒔き麦が増え、集落も増える。湧水が多いのだろう、細い灌漑水路があちこちにある。30分走って、食堂のある村で止まる。ソーラ村と言う。食堂へ上がる石段の下に、水路があり、清冽な水が流れている。カレーズの水が湧水だろう。床に座ってくつろぎ、昼飯である。先ほどの話になる。原さんは、バシュトゥン・ワリ(掟)では、義理人情、報復、女性守護が大事なんだと力説してくれる。そのひとつをたしかに体験したわけだ。ひとつひとつが分離している間はそれでもなんとかなるだろうが、3つが一緒になると、対処は難しくなると思う。特異な民族ではある。今まで、中国、東南アジア、インド、西アジアの農村で、家の敷地に入るのを制止された経験はない。家へ上がってお茶でもとか、飯食っていけ、東アジアだと、酒飲めと、むしろ断るのが大変である。それに比べてこの特異なバシュトゥン・ワリはタリバン時代に急に現れたものではないので、その背景がなにか、興味津津である。

その探索は簡単ではなさそうだが、アフガン戦争の際、アメリカにうまく利用されたことははっきりしている。タリバンは女性を隔離し、教育を受けさせず、蔑視していると、その偏狭さ、古臭さをフレ

ーム・アップする宣伝に利用された。昔からある伝統的な女性守護を女性隔離や蔑視であるとする代替え、タリバンは封建的、独善的で迷妄な体制であると触れ回れば、米・英の攻撃の野蛮さと独善を相当隠せるし、やむをえないと思う人も増えようという算段だ。その宣伝にうまく乗せられる特異さをパシクトゥンは持っている。しかし、その特異さは別の理解のしかたもあり、私にはむしろその方が正しいと思う。それは、城砦のような家そのものが示すように、父系の親族単位が著しい防禦的姿勢をもっていることだが、それは本来地方的な割拠勢力の連合と分裂の歴史を生き抜くのに必須の知恵で、女性隔離はその中のひとつの要素であるにすぎない。そして現地では女性隔離は保護のための手段で、保護が必要な状況が実際あるのだが、その状況を知らないほかの世界では、女性隔離が差別、蔑視とかしか見えず、アフガニスタンのような社会は因習的な社会、前近代的な社会と、蔑視される。近代的な社会が、セックスの商品化を露骨に、かつ功利的にやっていることは、棚上げにして。「近代」社会の言わばローカルな価値観をグローバルという包装紙でくるんで全く違う社会に押し付けても、結局は空振りにおわるだろう。まして武力で征服して考えを変えさせようとしても、結局は無駄な、しかも、痛ましい犠牲を生む無理強いにおわるだろう。

2時半頃に出発する。降り始めた雪の中を、2頭の見事なゼブ牛が行く。大きな体躯に、長く鋭い角が弧を描いて前に張り出している。そう言えば、カンダハル南のリゲスタン砂漠からクエッタのボラン峠を越えると、カッチ砂漠にメヘルゲル遺跡があり、紀元前7千年紀ぐらいの麦が出土するという報告がある。そこは大きな牛の骨もたくさん出土している。牛の家畜化はこのあたりで進んだのかもしれない。

狭い谷底に芽立ちした冬麦の畑が増える。半時間ほど走ったあたりから、道脇に赤い石ころが並ぶ。地雷の未処理地域だ。畑は植え付けていない。15分ほど未処理地域が続く。やがて昨日入った谷を左に見、まもなくカーブル盆地へ緩い坂を下る。ASSA ゲストハウスへまだ日のある内に着いた。

カーブル—チャリカル (Charikar)

3月3日

朝の散歩でパン屋を覗く。6人ほどがリズミカルに働いている。一晩寝かしたパン生地に指先で縦横の溝をつけ、貼り付け用の台にサッと水刷毛を引いて乗せ、大きな炉の内壁にぺたっと貼り付ける。2分ほどすると槍と小熊手で取り出す。ウズベキスタンと全く同じだ。街角に失対事業の人々がたむろしている。一日200アフガニーが日当だそう。ところで私は写真屋を探す。キャノンの調子が悪く、シャッターが下りない。原さんがダリー語で尋ねると、運良く近くにある。初老の技師が遮光袋の中でふたを開け、いったんフィルムを取り出す。フィルムがつかえていたようで、簡単に直った。有難い。

ASSA ゲストハウスへ戻り、ラヒムさんの車で UNEP へ行く。国連機関の役所はできるだけ避けたいのだが、駒野大使に教えてもらった報告書を貰うためである。受付の女性は20歳すぎで、ブルカは被らず、ジーバンスタイルである。UNEP へ行きたいのだがと告げると、見てくると、階段を2段とびで上がり、すぐ下りてきて、どうぞと言う。担当官はフィンランド人で、*Afghanistan: Post-Conflict Environmental Assessment* を欲しいのですが、と用件を言うと、差し上げますよ、しかし何のアサインメントですか、と一応所属、用件などを聞きとってから、1冊ずつくれた。概説、都市環境、自然資源、環境管理、勧告と、標準的構成で、作成には6チームが飛行機も使い、写真、衛星写真をたくさん配置した、きれいな報告書である。2002年の9月から編集にとりかかり、わずか1カ月の調査で、2003年早々に出版したものである。いわゆるコンサルタント報告だが、短期間でとまかく仕上げたことに意味があるのだろう。勧告は160いくつも並んでいて、正気かと言いたくなる。実施は度外視ということか、それとも、将来の活動に枠をはめることが狙いなのか。

さて、今日の第1目標は60キロメートル北のチャリカルで、そのあと、さらに北のサラン峠に向かうか、東のパンジシル渓谷へ入るか、行き当たりばったりで出発する。平坦な高原の道は16世紀前半、ムガル帝国の始祖バーブルがフェルガナか

ら300人たらずの部下を連れて、サラン峠を越えてカーブル盆地へ入った道である。最近には1979年、ソ連軍が戦車を連ねて侵攻してきた道でもある。さらにその後、カーブル盆地の北端のチャリカールは、パンジシール渓谷出身のマスードが根拠地にした所だ。カーブルの町を北へ外れると、つぶれた家が目立つ。戦闘ヘリとタンクで攻めるロシア軍に対し、ムジャヒッディンは初めはカラシニコフ銃だけで、後には臼砲や大砲で抵抗した。ロシア軍のタンクの残骸と、ロシア兵の死体が埋まった道だと、ラヒムさんが言う。ラヒムさんは、15歳すぎからヘクマティアルのムジャヒッディンになって戦ったが、なにか違うと感じて、5年で辞め、その後はイスラム団結党のサヤフについて、バグマン(カーブルの西)で戦ったそう。戦後はペシャワールに2年、イスラマバードに10年、アンティークの商売で暮らしてきたそうだから、アフガン難民ということになるのだろうか。

つぶれている家は、ロシア軍の破壊によるのではなく、タリバン時代にマスードの根拠地ということで攻撃され、つぶれたものが多いのだと言う。果樹園の木はもっと多かったが、見通しをよくするためタリバンが切ったそうで、畑もタリバンが塹壕を掘りまくって、灌漑水路がブツブツに切れてしまったそう。枝道の入り口に看板が並んでいる。止まって見ると、いろんなNGOが復興計画の看板を立てているのだ。折りよく、カレーズ復旧を進めている村まで行くという役人が通りかかったので、その車のあとについて、カラカン村へ行く。数キロメートル西へ入り、クッチというタジク人の部落へ着いた。高い土塀の家が密集している。水場に新しいポンプが据えられ、UNHCR K19と刻印がある。村のカレーズ技術者という初老の男と、もう一人の地主がカレーズの縦井戸へ案内してくれる。どちらも顎髭が白く、技術者はハジ帽をのせ、地主はターバンをしている。

土塀囲いの畑と果樹園の間を歩く。道沿いにクルミ、プラタナス、ポプラの木が多い。夏、木の葉が風にはためく情景が想像できる。園地はブドウが圧倒的である。雪を被った岩山が青空のもとに輝き、その麓まで畑と園地が緩い斜面で続く。すばらしい風景である。豊かな農村地帯である、いや、だった



写真8 カレーズの修復を進める人々。

に違いない。地主の男が言う。そうだ。アフガニスタンはジャナ(天国)だった。この部落はカレーズが28本あった。その水で小麦もブドウも豊かに実った。うまいメロン、スイカがいくらでもとれた。だが、今はほとんどがつぶれている。この穴を見てくれと指すところを見ると、道脇に大きな深い穴があいている。縦井戸が破壊された跡だ。それもだと、もうひとつの穴を指す。タリバンがやったのだ、やつらは人間じゃない、と二人は怒りもあらわである。この村はタジク人の村であることも、タリバンをあからさまに罵る理由のひとつだろう。マスード軍のムジャヒッディンが生活できなくなるように、タリバンがカレーズを破壊したんだ、とラヒムさんが補足してくれる。それはそうだろう。この超乾燥地帯で命の綱の灌漑水路がつぶれれば、作物はおろか飲料水がなくなる。生命の根を絶つに等しい。軍閥の勢力をすぐには有効かもしれないが、農民の支持を失う振る舞いだ。タリバンだけなら、そこまではやらなかったのではないかと思うが、初老の男たちの怒りを見ては、うかつなことは言えない。

修復は進んでいるのか、聞いてみる。今、リハビリを進めて、4本は水が出るようになったと言う。修復し終えたひとつの縦井戸を見せてくれた。7つの水車小屋村と同じ巻上げ装置チャルハが塚の上にある。掘り出した土で、直径12メートル、高さ2メートルの大きな塚が盛り上がっている。相当な土工量である。深さ10から15メートル掘るのだそう

だ。井戸壁の上のほうは片麻岩の切り石できっちりとまいてある。しかしまだ水は来ていない。母井戸の修復ができていないからだ。母井戸までは2キロメートルのカレーズを修復しなければならないと言う。NGOや国連などの支援で、1日3.5ドルの労賃が支払われ、修復は進んでいる。地主の男が言う。水が来るようになれば何でも作れる。ハシャルという水利組織があり、毎年共同で砂さらえをし、面積に応じた灌漑時間を計って、水を畑と園地に回す。そうすれば、アフガンはまた天国になる。水車小屋村ではタリバンの悪口は聞かなかったと思い出しながら、水車は？と聞いてみた。答えは、あったがソ連軍につぶされた、だった。それに、今は小麦を植えられないから、水車を作っても無駄だ、麦を作れるようになれば、また据えつかけると言う。ご多幸を、と握手をして別れた。

北へ走る国道沿いはぶどう園が広がる。すぐカラ・バークのターミナルである。ここはパープルがカーブル攻略前にユルトを張って戦術を練った所である。このあたりはブドウ酒の産地である。『パープル・ナーマ』には、カーブルの村々にぶどう、ざくろ、杏、りんご、まるめろ、なし、桃、プラム、ナツメ、アーモンド、くるみが豊富であるとあり、さくらんぼを植えさせると、良く成長していると、記述がある（間野英二訳注『パープル・ナーマ』松香堂、1998年、p. 201）。今のぶどう園は畝を立てて間に灌水をする方式だが、パーブルのころも同じだろう。さて、今年の秋、ブドウ酒は作れるのだろうか。

右にバグラム空軍基地が現れ、タンクの残骸がいっぱい転がっている。今は、ISAFの基地である。チャリカール手前で地雷未処理地域が広い。ここはタリバンとマスード軍両者の前線だったので、地雷がとくに多いのだとラヒムさんが言う。

チャリカールの町へ入って、四つ辻左かどのパンジシール・レストランで昼飯である。入り口の上に大きなマスード將軍の肖像があがっている。この將軍は9.11事件の二日前、2001年9月9日に暗殺された後も、人気が高い。北部同盟の將軍の中でも、カリスマ性が際立っていたというのだが。暗殺犯は、北部同盟の映画を作りたいと訪れた二人のアラブ人カメラマンで、自爆テロだったが、その後関

係や意図は今も判明していない。食堂の中はタジク人のごつい男たちでいっぱいである。いかつい感じではなく、背が高く、深遠とした表情である。

食後、サラン峠へ向かうことにする。東は平坦な盆地底が広がり、西は雪山の山裾に岩石扇状地が緩く上る。すぐ左に幅15メートルほどの水路が南北に走っているのて止まる。ソ連侵攻前に、中国の援助で完成した水路である。カーブル盆地北部の重要な灌漑水路で、今も機能している。畑は3メートル四方の小区画畑が延々と続いている。秋蒔き小麦がだいが伸びている。ヒンズークシ下ろしの猛烈な寒風に耐えられず、早々に出発する。水の多い河を越えて、すぐ左にパーミアンへ行く道があるが、我われは直進する。扇状地にタンクが数十台転がっているのを見て、すぐ、サラン峠から下ってくる河を越える。橋は壊れているし、河の崖にタンクが引っかかっている。谷口の村は石積み家が連結して、ひとつの城砦の形である。トラックが数十台、峠の方を向いて並んでいる。どうやら、サラン峠が閉鎖されているらしい。すぐチェックポイントがあり、素性は判らないが、銃を持った男たちが見張っている。アフガニスタンのチェックポイントはどこもそうだが、スピードを緩めるだけで、ほとんどフリーパスである。

ゴルジに入ると、まだ3時半だが、山稜がのしかかり、うす暗くなる。山は短い枯れ草がまばらに生えているが、大部分は片麻岩露岩と礫の急斜面である。溪流は清冽な水で、平和な時代なら、家族連れのピクニックで賑わうのだろうが、今は行き会う人一人いない。屈曲部に少しばかり堆積した狭い河岸段丘にはそれでも麦畑があり、緑が芽吹いている所もある。畑の上流側には溪流を引き込んだため池が必ずある。冷たい谷水を温める仕組みだろう。まれに、急斜面に張り付くように、数戸の家がつながって建っている。石壁に小さな窓があるが、人気はない。なにで食っているのか、想像もつかない。溪流を渡渉するところがあり、そこにもタンクが長い砲身を寒風にさらしている。人も車もない谷底はいい気持ちはしない。4時になったし、峠は閉鎖されているし、帰ることに誰も異存はない。

チャリカール平原に下って来て、後ろを見ると、ヒンズークシの雪山が青空の下に光芒を放ってい

る。その中にサラン峠へ通じる谷がくっきりと一本だけ刻み込まれている。峠まで行き着けなかった悔し紛れに、絶景、絶景と叫んで、青と白の景色をカメラに収めた。

看板が林立している所で止まる。NGOやUNが実績を誇示する看板である。雇用促進、ダム建設、2002希望村、300戸落成、クリニック、学校、高校建設、給水改善、教育促進、収入創出、農業改善、道路修復、衛生施設、女性のための保健教育、村落建設、コミュニティー学習センター、運河修復、カレーズ修復、井戸15本、など。実施団体と財源団体の名前が一緒に明示されている。最初の日にアルガンド村のインテリがカレーズ修理の金を持って来いと言わんばかりの口調だったのも当然のことかと、得心がいく。

6時にASSAゲストハウスへ帰り、晩飯の後、川村夫妻をまた訪ねた。バシュトゥンの女性の位置について、話がはずんだ。夫妻が友人の結婚式に招かれた時、奥さんが女性の部屋に入るのを許されて、驚いたと言う。みんなブルカを脱ぎ、ごく普通の服装で、しかも、大声で歌い、輪の真ん中に一人ずつ立って、踊りまくるのだそうだ。それは良くわかる話である。コーカソイド的な欲望の強さがバシュトゥンだけ消えるとは想像できない。特異に見える性格は、アーリア系の強い家父長権威主義が、他民族の侵入・混交、地方勢力の割拠と連合を繰り返す厳しい流動社会に適応し、それにイスラム的な女性保護の制度が加わった結果だろう、といった結論になった。それに、町では学校や会社、官庁などで、外の世界の影響が入ってくるが、村では、伝統的な制度が圧倒的に強い。女性は家の中で料理、洗濯、育児、家事と、生活を支えている。要するに家の中で女性は結構、権威があり、強く、たんに虐げられている存在ではない、といった話だった。そうした生活の中で家族の絆は強いものがあるだろうし、お互いにかけがいが無いと思う気持ちもあるにちがいない。男は外敵から家族を守り、女は家族の生命を養う。家族の最も本質的なありかただ。物質的には貧しいかもしれないが、生命の本質的なありかたを達成するのに、車や、テレビや、きらびやかな服や、そうしたものは付け足しに過ぎない。本質に棹差さず、ものを浪費して環境汚染を進め、欲のために家

族の絆が壊れ、生命を躍動させる楽しみを失ってしまった人々は先進国にゴマンといる。その悲しみを進歩と勘違いして、世界中を悲しみに覆い尽くすような精神の倒錯はいい加減にやめることだ。グローバル・スタンダードを礼賛し、世界にそれを広げようとする勢力のことである。

夜10時半を過ぎ、川村さんに車でゲストハウスへ送ってもらう。通りは灯りがなく、対向車もなく、ヘッドライトだけが頼りである。川村さんも、こんな夜遅くに走ったことはない、少し心配ですと、心細い。市場の北東まで来るとさすがに明かりがあるが、車はほとんどいない。無事着き、健闘を祈って別れる。

カーブル—ジャララバード—トルハム

3月4日

今日はジャララバードまで約120キロメートルの行程だが、まず、カーブルで見落としたものを見ることになる。カーブル南郊でダルラマン通りを突き当たると、低い丘があり、そこに大きな建物がある。1923年にアマノラー王がフランス人建築家に建てさせた王宮だとラヒムさんが説明する（これはデュプレの『アフガニスタン』によると、議会と事務局が目的だったが、その目的には使われたことはなく、1977年当時、法務省が使っていたとある）。1919年に始まる第3次英国・アフガン戦争を戦って、完全独立を獲得した王がここダルラマンに新しい首都を移し、近代化を進める施策で官庁、宮殿、別荘、トロリー、凱旋門、カフェー、などを次々と建築したのである。東側を正面とし、コの字型に広場を抱く3階建ての堂々たる建築で、各階柱廊をめぐらしてネオクラシック・スタイルを模している。内戦時代、マスード、ヘクマティアル、ハザラ勢力、タリバンがかわるがわる基地に使い、その度に戦火にみまわれたそうである。柱廊はあちこちが壊れ、壁には大きな弾痕が残ったまま、廃墟になっている。田園をはさんではるか東南の丘には王の私邸と迎賓館が見える。西側を見下ろすと、フランス風デザインの公園と、その向こうに博物館があるが、これも廃墟である。

こうした抗争はデュプレの本によると、アマノラ



写真9 軍閥間の戦闘で破壊されたカーブルを象徴するダルラマン宮殿。

一王が新都を作り、近代化政策を進めた時にも激しく燃え上がったようである。王が女性のブルカの廃止、男女共学、宗教勢力の抑圧など急進的施策を打ち出したことに対し、タジク人勢力が反乱をおこし、王はジャララバードへ逃れ、のちにイタリーへ亡命し、1961年にそこで没した。王位を篡奪した独立戦争の英雄ナディール・シャーは、英・露の間でバランスをとり、イスラム法の復活を宣言し、新憲法を發布し、中央集権化を進めようとしたが、前のアマノラー王の残存勢力やタジク人勢力、抑圧された勢力などの間に不満と反対が渦巻き、ナディール・シャーは学生に暗殺された。王位を継いだザヒール・シャーの治世は40年間、国内各派の均衡をとり、やっとアフガニスタンに平和な時代が訪れたのだが、その平和は1973年に王政を捨てて生まれた短期間の共和国制の後、冷戦末期のソ連軍の侵攻で崩壊した。そして、こうした分裂と抗争の風土はアメリカとアルカイダ二つの世界勢力に利用されることとなり、米・英の野蛮な戦争の衝撃で、アフガニスタンはザヒール・シャー以前の時代に帰ってしまった。「天国」のアフガニスタンは再び、分裂抗争の時代に投げ込まれている。

廃墟の大建築を降りて、北側の小区画畑を写真に撮っている時、男が一人、ゆっくりと歩いてくる。見ると松葉杖をつき、左足が義足である。地雷で飛ばされたか、タリバンに脚きり刑を受けたのか。ベトナムでも地雷で足を失った元兵士の義足姿をたくさん見かけた。ベトナムでは、さらに枯葉剤で、先天性奇形児が多数生まれ、被害が次の世代に遺伝している。アフガニスタンはその点、まだ不幸中の幸いか。しかし、劣化ウラン弾という事実上の核爆弾



写真10 コンクリート床に絨毯を敷いただけの教室で、学ぶ子供たち。

が米軍によって使用された。その被害はどうなっているのだろう。イラクでは湾岸戦争後、数年してから、劣化ウラン弾によると想定される癌や奇形児出産が多数発生した。ラムゼイ・クラーク（ニクソン時代の米国司法長官）の主催するインターナショナル・アクション・センターが多数の奇形児や死産のむごたらしい写真をインターネットで流して、米軍の爆撃を告発している。アフガニスタンでも数年の内に同様の悲惨な状況が明らかになってくるに違いない。紛争は武力で解決する以外方法はないと思ひこみ、国益のためには先手必勝を実行する超大国が、大量破壊兵器の最大の所有者である今日、ベトナムやアフガニスタンのみならず、世界の未来は暗雲に覆われていると思わざるをえない。「天国」は今までより格段に見果てぬ夢になろうとしている。

少し北へ歩いて、50メートル四方の堀囲いの中へラヒムさんが入る。構内にモルタル塗りの2階家があり、南端に「アフガン難民支援物資 JRUFU」と書かれたコンテナが1台ある。督永さんたちとJR労組の支援団体の活動拠点である。家の持ち主はロンドンにいるそう。建物は1階がラヒムさんの経営するカーペット工場、2階が識字学校である。ラヒムさんはその校長先生でもある。カーペットを織っているのは8歳から15歳までの男の子と女の子で、仕事の後、この子達は2階の教室で識字教育を受ける。2階へ上がると、別のクラスが勉強中で、若い女性の先生が顔を出して教えている。生徒は全部で200人、先生は女性が2人、男性が4人、授業料は無料、先生の給料はJRUFUとSORAが出している。政府の学校だと、先生の給料は月30ドルだが、ここは50ドルで、米1キロが0.5ドル（アフガン産の



写真11 パーブルの公園に立つシャー・ジャハンのモスク。パーブルの質素な墓がこの上のテラスにある。

米)の価格水準では、いい給料で、先生の希望者も多いそうである。公用語のダリー語以外に英語も教えている。ダリー語はペルシア語のアフガニスタン方言で、アラビア文字で表記する。ペルシア語の判る原さんがこの農民と話ができるわけである。クラスの終わった生徒と一緒に外へ出る時、女性の先生は、背中に垂らしていた顔覆いをスッポリと被った。

最後に訪ねたのは、パーブルの墓である。パーブル公園として知られている。シェール・イ・ダルワザ山の西山麓に数段のテラスが刻まれ、そこから見るカーブルの眺望は雪山を背景にして、すばらしい。パーブルはデリー近くのアグラで亡くなったが、自分の作ったこの公園を愛して、ここに埋葬を依頼したのである。パーブル自身は墓をむき出しのまま、日と雨の打つに任せるよう言い残したが、ナディール・シャーの時代に、大理石の墓石を置き、小さな東屋で蓋ったそうである。パーブルの墓はつましいもので、むしろ、下のテラスにムガル帝国5代目のシャー・ジャハンが立てた大理石のコンパクトなモスクのほうが立派だし、南側にアフガニスタンのアブドゥル・ラーマン王が19世紀末に王妃のために建てた夏の宮殿はそれよりさらに豪華である。これらの建築も戦火で傷つき、建築家たちが修復の測量をしている。閉じられている夏の宮殿の内部を見たのは、若い技師たちのおかげである。日本人だと言うと、おお、と顔を崩し、蒸し風呂や、居室を案内してくれた。今のところ、親日感情が結構強い。有難いことである。尤も修復を財政的に支援しているのは、パキスタンのアガハーン財団であ

る。これはイスマイル派の財団で、文化、芸術活動への支援で有名だと、原さんが言う。握手をして辞し、我われがぶらぶらしているとき、韓国の大使一行が訪れ、墓の前で行き会った。館員らしき一人が人相を見極めに来て、どちらから?と聞き、京都と東京の大学からと答え、安心したかのような様子だったが、墓だけ見て早々に引き上げた。

12時も過ぎたので、カーブルを出発する。東郊外へ出ると、田園地帯の中に、工場が結構たくさんある。10分ほどで、ISAF(国際治安支援軍)の司令部と、広大な兵器装備の貯留場が現れる。目隠しのテントで見えないが、時々、切れ目から装甲車やトラックの列が見える。それを過ぎると、土漠と木も草もない丘や低い山が続き、タンクの残骸が点々とある。やがて、硬い片岩の岩山になり、カーブル河は深い渓谷に入る。マヒバル(魚飛びの意)峠といい、道は300ないし400メートルの切り立った崖の下を行く。狭い道脇で地雷の処理作業をやっている。この道に地雷を仕掛けると効率はいいに違いない。この峠の方がカイバー峠より谷が深いし、危険も大きいと、ラヒムさんが言う。高いダム壁が現れる。マヒバルダムで発電する電気は、もっと下のナグル、サロウビの発電所の電気とともにカーブルへ送られている。うねる急坂をパキスタンからのトラックやバスが登ってくる。ラヒムさんが指す方を見上げると、高い断崖にぽっかりと穴が開き、そこから白い砂礫がズリ落ちている。玉を掘る坑道があるのだと言う。働く人影がゴマ粒のように見える。

一気に1,000メートル近く下って、平坦な河谷低地へ降りた。カーブル河の河幅は50メートル、河谷は300メートルほどに広がり、カーブルの街中のドブ川からは想像もできないきれいな水がせんと流れている。河岸には芽立ちした麦畑が小さな皿のように並び、春めいた光を浴びている。やれやれと一息ついた所に飯屋がある。レンガの角柱をめぐるして屋根を掛けたテラスが庭にあり、床に座って瀬音を聞きながら弁当を広げている人たちがいる。ほの暗い室内に入ると、たたきの床にアンペラが敷かれ、とがった鼻、ひげの濃い男たちがどっかと座って、飯、ナン、肉、玉ねぎスライスの盛られた大皿を前にしている。自然光で撮ればいい写真になるなと思いながら、フラッシュをたく。飯が終わる

と、少年が茶をくばってくれる。中国製らしい染付けの茶碗である。気分がくつろいで、アフガニスタンの結婚の話になる。ラヒムさんによると、完全に親だけで決める場合もあるが、普通は、男が女の親に娘と結婚したいと申し込み、合意ができると家族で会い、数カ月間付き合ってから結婚式をあげるのだそう。しかし知り合う機会がこれだけ少なくて、顔も見えないし、どうするのだろうと思うが、余計な心配か。

1時間ばかり、のんびりして、出発する。すぐ再びゴルジに入るが、今度は谷も浅く、5分ばかりでまた河谷低地に降りる。両側の平坦な低い丘は上部30メートルが円礫層、その下に緩く傾斜した地層が100メートルほど露出する。傾斜地層には時々紫赤色の層があり、塩類を含む中生代の堆積物である。しばらく行くと、ナグル湖が現れる。パンジシール川がカーブル河と合流する地点にあり、夏、河は増水し、収穫後の麦畑が冠水するほど、谷は水をかぶるそう。

一旦円礫台地上がり、横断して次の河谷低地へ下る。サロウビの谷底低地である。そこは緑の絨毯を敷き詰めたような麦畑が広がっているが、少し高い崖垂と斜面はまったく生氣のない土漠である。このあたりの景観はナイルの河谷と同じで、一面の土漠の中で水のある低地だけが生命のある緑の帯になる。それはカーブル盆地も同じだが、小さい谷では、緑の帯と灰色の帯の対比が明瞭で、水の有無が生死を決める様子が明瞭である。やがてサロウビの小さな集落を通る。木箱を並べたような店が集まったオアシス集落だが、古くから重要な交易集落に違いない。今も、パーブルの頃も、もっととんで新石器農

業革命が広がり始めた1万年前も、ほとんど変わらない情景だっただろうとすら思える。

集落を抜けると再び片麻岩の岩山と円礫台地、狭い低地がかわるがわる現われる。谷は片麻岩体に生じた断層破碎帯らしい。パッチ状の低地に麦畑が点在する。牛、ラクダ、ヤギを連れた遊牧民が歩いていると見ているうちに、丘の下の中道にヨシ俵を伏せたような小屋が現れたので止まる。小屋の方へゆっくり近寄っていくと、幸い犬はいないらしく、子供が跳んできた。小屋の集まっているあたりには女もいるが、顔はむきだしだ。やって来た男たちは垢のこびりついた服装である。彼らはクッチという遊牧民で、このキャンプには9家族いる。ラクダ、ロバ、ヤギ、牛などを飼っており、搾乳もする。1、2年前の旱魃で多数の家畜が死に、今も生活が苦しいと、口々に言う。地雷に触れて死んだ家畜も多い、人間も怪我をしたものはたくさんいる、これを見てくれと、顔と脚を指す男を見ると、ほおに黒い点が痣のようにになっている。爆発でとんだ砂が顔にめり込んだと言う。右脚は義足である。遊牧は、冬はこのあたりで放牧し、4月にカーブルの北へ家畜を連れて移動し、農民の麦刈りを手伝って、1日小麦2キロ、もしくは200アフガニーの労賃を貰う。秋、放牧をしながら、この谷へ下ってくる。そういう生活である。この人たちは習俗が明らかに違う。もっともはっきりした違いは女性の服装で、派手な色物のサリーを体に巻き、顔にも派手なスカーフを巻く。それにチャドルで顔も隠さない。インドのトライバルと言われる人たちの服装に近い。

内戦で一番、ワリを食ったのは、遊牧民だろう。バシュトゥン、タジク、ハザラ、ウズベクなどの人々は、自発的か強制的かはともかく、自分たちの勢力を作り、パイの分け前にあずかった面もあっただろうが、遊牧民はそうした勢力圏の外で自由に、あるいは勢力の浮沈に無関係に暮らしてきたのに、内戦による物理的破壊の影響だけは、平等に受けたか、むしろもっと大きな影響を受けることになっている。抗議の声をあげる素地もほとんどない。弱者よ、汝の名は遊牧民なり、だ。それとも、事実もっと複雑で、移動生活を生かしてドラッグの運び屋で潤うといったことがあるのだろうか。鳥小屋のような家を見る限りでは、その可能性はほとんどな



写真12 遊牧民クッチ族の子供。背後にヨシ俵のような家のキャンプが見える。

いと思うのだが。

夕暮れが迫ってきて、ジャララバードへ急ぐことにする。両側にクッチの家が増える。カーブル河の円礫を積んで壁を作り、天井にヨシをのせている。100頭、150頭の羊の群れを追う姿も増える。ところどころ、モクマオウの植林地が出る。それより低い川岸には、麦畑が広がる。左のカーブル河が幅1キロメートルほどに広がり、川水は砂川原を網状に流れている。あちこちにヨシ原の湿地が広い。クッチの家の材料だ。アスファルト道になり、スピードがあがる。岩の丘がでて、そこにダムが作られている。ダルンタ・ダムだ。ダム湖で捕った魚をフライにして売る露店がある。

トンネルを2本越えて、ジャララバードの盆地へ入り、すぐ大学脇を通る。ジャララバードは地図で見ると、カーブル盆地の2倍はありそうだ。高度計は570メートルをさしている。気候はより温暖なのだろう、ナツメヤシ、パルミラヤシがあるし、オレンジの広い園地もある。養蜂も盛んなようだ。地図ではカーブル河は盆地の北端を東西に流れ、南の国境山地から流れ出る河が何本も盆地を潤して北へ流れ、カーブル河に入る。町の入り口にはFAO Water Resource Projectの事務所もある。町中はまさに復興のさなかの混雑だ。穴ばこの悪路は道脇に積まれた石材や砂利、材木、行きかうトラック、ラクダ車、牛、馬の八車で渋滞している。アコウを植え込んだ公園を過ぎて、薄暗がりのなか、今日の宿舎スピンガー・ホテルへ無事着いた。

すぐ、日本国際ヴォランティアセンター（JVC）を訪ねることにする。JVCがNGO非戦ネットを立ち上げたとき、新聞紙上で知って、私はそれらしいことを何もしていないのだが、賛同して会員になった。JVCの谷山さんがジャララバードに居ることをメールで知ったので、会う予定をしていたのである。ラヒムさんと探して行った所は間違いで、ベシャワル会医療サービス（PMS）のジャララバード事務所だった。そうそう、有名な中村哲医師のNGOだと知って、できれば会いたいと思ったが、丁度ベシャワルへ行かれた由で会えず、また尋ねながら、JVCへ行った。谷山さんのほかに、蜂須賀さん、イラクから来たばかりだという新村さん、若い看護婦さんなどに会った。アフガニスタンに居る国際

NGOは82団体にのぼり、2,500のプロジェクトがあるそうだ。JVCはおもに医療活動で村むらにアプローチしている由で、巡回医療を行い、医薬品、食料品、毛布を配り、とくに難民キャンプの女性を女性医師や看護婦で診療することが好評を得ているそうだ。こうした地道な活動で信頼を獲得していきたいということだった。途中会った遊牧民クッチのことを話すと、盆地北側、クナール河のコティ村にクッチが多数おり、FAOの現地スタッフが旱魃と戦災による家畜被害調査を行い、まもなく報告が出るということだった。勿論、被害は家畜だけではない、ジャララバードの南のサフェード山地にオサマ・ビン・ラディンのトラボラ基地があり、米軍がその一帯を攻撃した際、山村で多数の村人が犠牲になった。そのあたりや、北側のクナール河一帯にはタリバンがまだ多数いると言う。イラクの情勢に話に移り、もしイラク攻撃が始まったら、JVCも撤退せざるを得ないかもしれない、外国人に対するテロが予想されるので、ということだった。こちらの焦点がぼけているせいで、話が分散してしまい、2000年から2002年にかけて、ベシャワル会が大車輪になって取り組んだ大旱魃や、集中的に井戸掘りをやったダラエ・ヌール渓谷（北側）や西のソルフロッド郡の様子を聞き忘れた。

スピンガー・ホテルへ帰る道は停電のため真っ暗で、星空がすばらしくきれい。ホテルは植え込みの広い庭に囲まれ、アフガニスタンで泊まった宿では最高級である。部屋は簡素だが、広く、天井が高く、シーツはパリッとのが利いている。明日はカイバール峠を越えてパキスタンなので、原さんとアフガンのぶどう酒で乾杯した。

3月5日

デュプレによると、ジャララバードはムガール帝国のアクバル皇帝が16世紀後半に建造した町ということになっている。カーブルの王たちはこの避寒地に王宮をいくつも建造した。カーブルにダルラマン宮を作ったアマノラー王の祖父や父もジャララバードに宮殿を建てている。父王ハビブラーはラグマン州で狩猟中に暗殺され、その墓はこのゴルフコースの中にアマノラー王が作り、アマノラー王も1960年にチューリッヒで亡くなると、その遺体は

父王の脇に埋められ、さらに1968年にローマで亡くなったソラヤ王妃もその横に埋められているようだ。

もっと遡ると、2世紀から7世紀ごろ、ジャララバード地域はナガラハーン国という名で、仏教世界の最も有名な聖地だった。釈迦が弟子たちとブルシャブラ（今のペシャワール）やナガラハーン（今のジャララバード）を訪れ、釈迦の頂骨、歯、錫杖を納めたストゥーパが後に建てられていたのである。中国の初期の求法僧法顕も5世紀初頭に訪れている。法顕伝には次のようにある。「ナガラハーン国界の醯羅城〔今のソルフロッド郡ハッダ付近〕に到る。城内に仏頂骨精舎があり、ことごとく金箔、七宝で飾ってある。国王は頂骨を敬重して人に奪われることを恐れて、そこで国中の豪姓八人を選んで人ごとに一印を持たせ、これによって封印し守護させている。これら八人は……戸を開きおわると、香水で手を洗い、仏頂骨を出し、精舎外の高座に置く……骨は黄白色でさしわたし四寸あり、上部は隆起している。毎日、日の出ののち、精舎の人が高樓に登り、太鼓を打ち、螺を吹き、銅鉦を叩く。王はこれを聞くと精舎に参詣し、華香で供養する。供養しおわると順次に礼拝して去る。王は毎朝このように供養礼拝し、しかる後に国政を聴く。」「ここから北行すること一由延でナガラハーン国に到った……この城中にもまた仏歯があり、供養は頂骨の法と同じである。城の東北一由延で一つの谷の入口に到る。仏の錫杖があり、ここでも精舎を建てて供養している。」「ナガラハーン城の南半由延に石室がある……仏は〔自らの〕影をこの中に留められた。十余歩離れてこれを見ると仏の真影を見るかのようである。金色の姿は光り輝いている」(『法顕伝・宋雲行紀』長沢和俊訳注、平凡社、1971、pp. 46-48)。

7世紀半ばには、さらに玄奘法師も訪れている。その時にはナガラハーンの仏教はやや凋落の傾向が現れているが、仏頂骨のあるハッダでは正法がまだ行われている。大唐西域記に次のようにある。「ナガラハーン国は……迦畢試国に隷属している。穀物が豊かに花や果が多い。気候は暑熱に、風俗は質実である。勇猛果敢で、財貨を軽んじ学を好む。仏法を篤く敬い、異道を信ずるものは少ない。伽藍は多いけれども、僧徒は僅かである。もろもろのストゥー

パは荒れはてて壊れている。……城内に大きなストゥーパの基礎の跡がある……昔は仏の歯が収納されていて高くもあり広くもありりっぱなものであった、……今はすでに歯はなくなただ基礎の跡が残っているだけである。」「ハッダ城中の人は質朴で正法を信じている。二階建ての閤があり、……第二層には七宝の小さなストゥーパがあり、如来の頂骨が安置してある。骨は周囲一尺二寸。毛穴は明瞭で、色は黄白。……拝観礼拝する人が引き続き絶えない」(『大唐西域記』水谷真成訳、平凡社、1971、pp. 50-53)。釈迦を尊崇する身としては、仏頂骨や仏歯のあるストゥーパ、仏影窟は是非訪れたい所だが、時間が無い。次の機会を期すが、市場だけは一巡する。

市場付近はアコウの大木の濃い緑陰に露店が並び、顔を露出した女性が華やかなスカーフを売る店があるとか、サトウキビを売る店があるなど、パキスタン的な感じになる。手押しポンプ場は水を汲みに来る人で一杯だし、饅頭ほどのチーズ、ナン、生野菜、色とりどりの香辛料、果物、堅果、植木の店が道端に並び、買い物客が群がり、ラクダ、ロバ、馬の大八車、自動車、トラクターが人々を掻き分け、ごった返している。町東端のターミナルは国境のトルハムへ行くたくさんのタクシー、バスで埋まっている。

町を抜けるとすぐ小区画畑の農地が広がり、水路が高密度に分布する。平坦な盆地底に農業地帯が広い。しばらく行くと、地雷処理の人々多数が作業中なので、止まって見る。UNHCRが支援する環境保護計画だそうで、処理作業をする人たちは、アフガン技術コンサルタントと描いた大きなゼッケンを付けている。2001年10月の米軍による爆撃の際、地雷処理に当たっていたこのNGOグループは、たしか誤爆されて数人が死亡している。大きなゼッケンは誤爆を避けるためだろう。2チーム、64人でも、昨日処理した地雷は、12発だと言う。キャッチャーのような胸当てと溶接工のようなマスクを付けて、道脇や、水路堤をソロソロと手で掘っている。パワーショベルのような日立の無人処理機が1台だけあるのだが、爆発の衝撃でたえず部品が壊れ、補給が追いつかないと言う。地雷の売値は1個数ドルだが、処理には1個300ドルかかるそうで、この経



写真13 畝間灌漑の溝掘り作業。ジャララバード東郊。

費と時間と努力を振り向ければ、バーミヤンの大仏をいくつ作れるだろう？人類の愚行は途方もない。

東へ進む。川原を越えるたびに、クッチの小屋の集落がある。中に、ソ連軍侵入時以来の難民キャンプがある。難民がカーブルへ戻った今はクッチが利用するところも広い。派手なサリーを巻いたクッチの女が羊群を追っている。円礫の平坦台地へ上がると、無人の難民キャンプ跡が広大に広がる。この水がない円礫台地はクッチも住まず、羊を放牧するだけだ。低地へ降りると、広大なオリーブ園が続く。ロシアへ輸出するそう。園地の次は畑地帯になる。モクマオウ、ユーカリの防風林があり、水路が縦横に走る。長地の小麦畑に麦が伸びているが、野菜を間作する畑は溝を掘り、きれいに揃った畝を立てている。片麻岩の100メートルばかりの小丘の麓には、小村が点在する。ワジ川と運河が代わる代わる現れ、運河沿いの地表に少し塩が吹く。農民が多数畑で働いている所で止まる。レズガイ村ガズグである。畑に溝を掘っているのだが、その道具が面白い。レーキにロープを付け、一人は柄を押し一人はロープを引き、二人一組でレーキの幅だけ土を掘り上げて少しずつ溝を伸ばす。半メートル幅の溝に水を引き、畝の肩にトマトの苗を植えている。幅1.2メートルの畝一杯にトマトが大きく枝を張ると言う。このあたりは秋蒔き小麦地帯で、麦はすでに40センチ程に伸びている。大旱魃の危機はとりあえず脱したようだ。豊かな農村風景である。

東へ進む。大きな2頭のゼブ牛にハローを引かせ、人がハローの上に立っている。レンガを焼く円形の高いキルンが現れる。インドがパキスタンの風景になってきた。キルン脇は地表に塩が吹いている。そ

ろそろ、ジャララバード盆地が絞られ、カイバー峠を抱く山地が接近し始める。片麻岩の低山と円礫台地が交互に現れ、山が次第に高くなる。低地へ向かって山裾から礫扇状地が延びようになる。その地表に薄く緑の刷毛ではいたような草が伸び始めている。原さんが、春分を過ぎると、急激に草が伸びて、産ぶ毛のようになり、いい感じですよーと言う。今、すでに子供たちが300頭ほどの羊を放牧している。ダカーという小町を過ぎると、トルハムへ15キロである。羊の放牧が目立つ。

やがて、トルハム・バザールに入る。ターミナルに今度はジャララバード方面へ行くタクシー、バスがたくさんたむろする。1間間口の箱のような店が並び、国境へ向かう人、国境から出てきた人が通りを埋めている。道の突きあたりに鉄柵のゲートを半開きにした国境事務所がある。赤ん坊を抱き、夫と手をつないだブルカの女性、グループで往来する人びと、一人で行く人、国境の緊張が人々を包んでいる。アフガニスタンから出国の検査は簡単である。ゲートを入った広場に座っている係官がパスポートをチラッと見て、たまに不運な旅行者の荷物を広場の土ぼこりの上で開かせるぐらいである。ラヒムさんも一緒に入って、ニッパ・トラヴェルの出迎え人を見つけ、我われを手渡してくれる。ここで我われはラヒムさんと抱擁をかわす。短い期間だったが、お世話になった。もう一度必ず、もう少し時間の余裕をもって来ると堅い握手で別れる。出迎えの運転手について今度はパキスタンの入国事務所へ行く。これは低いががっしりした建物になり、重いドアを開けると、たくさんの人が並んで待っている。これはひまがかかるかと観念しかけたが、出迎えの運転手が我われのパスポートを差し出すと、すぐ入国スタンプを押して返してくれた。あっけなく、パキスタンへ再入国できた。

トルハム—イスラマバード

とは言え、ニッパ・トラヴェルの運転手は、銃を持った兵士一人をピックアップし、同乗させる。ここからカイバー峠まではトライバル地帯で、危険度が高いのだと言い、写真もストップもだめだと念を押す。道は緩く上りとなり、片岩、片麻岩のごつご



写真14 荒涼としたカイバー峠。谷の向こうの豊かなガンダーラ平原へ征服者たちが進軍した道。

つした岩山が次第に高くなる。すぐ、山裾のランディコタルという町を通る。ここはパキスタンの鉄道の終点で、西へ延びてきたレールはここで終わる。ターミナル町はアフガニスタンへ向かう大型トラックがひしめき、人でごったがえしている。出発して、比較的緩い斜面の谷を行く。高くて長い土塀囲いのバシュトゥン・スタイルの家が点々とある。そのうちに、とりわけ巨大な、周囲数キロに及びそうな囲いが現れる。ユバ・フロディというドラッグ・マフィアの基地で、中にはメンバーの家、工場、病院、店があり、独立国のようなものだ、と運転手が言う。農業基盤がつぶれたアフガニスタンは、今、アヘン生産が復活し、厳しく取り締まっていたタリバンが解体されて、巨大産地になっているという話はよく聞く。インターネット情報では今年のアヘン生産は3、4千トンに上るだろうと推定されている。我われの駆け足旅行では、全くケシの姿を見なかったが、ガズニ道の村むらを指して、アヘン交易で食っているとラヒムさんが言っていた事を思い出す。正義を振りかざした行動が、闇の世界を活気付ける、皮肉な結果を生んでいる。

トライバル地帯は19世紀の終わりに大英帝国が作った装置である。アフガニスタン、インドへの進出機会を窺うロシアに危機感をつのらせ、アフガンのアブドゥル・ラーマン王(アマノラー王の父)と協定して、イギリスはアフガニスタンとインドの間にデュランド・ラインを引いて国境としたが、デュランド・ラインはバシュトゥンの領域を分断した。その意図はそこをロシアとの緩衝地帯にすることだった。独立不羈のバシュトゥンはロシアが侵入すれ

ば、それに必ず抵抗して、ロシアの力をそぐに違いないと、期待したからである。そして、そこをバシュトゥンの自治に任せた。パキスタンも分離独立の後、この方針を受け継ぎ、バシュトゥンの卓越するチットラル、スワット両渓谷、インダス東側の領域からバルチスタンとの州境までを北西辺境州とし、アフガニスタンと直接国境を接する山岳地帯をトライバル地帯としたのである。

道は岩山地帯を緩く、うねうねと上る。やがてカイバー峠、高度1,080メートルである。以前に英国軍が作った城砦がある。古来、アレクサンダーの軍隊も、チムール、バーブルの軍隊もここを通った。中央アジアからインドへ抜ける要衝だ。ヒンドゥークシの高い岩山は、ここで低く狭まり、大軍を動かすにはほぼ唯一の通路になっている。ビューポイントで止まり、稜線の切れ目からガンダーラ地方を遙かに望んで、感慨にしばらくふける。そこはアフガニスタンと全く異なる世界である。衛星写真はアフガニスタンとパキスタンの違いを、残酷なほど明瞭に映し出している。地球のしわのようなヒンドゥークシ山地の重なり合った皺が南北に走り、西側は茶色の土漠、東は緑の浮き出るインダスの沃野である。面積はアフガニスタンが64万平方キロ、パキスタンが80万平方キロと大差ないが、豊かさの差を人口で見ると、2,000万人に対し1億5,000万人と7倍の差がある。中央アジアの征服者たちがインドへ侵入する目的は、この豊かさである。何のごまかしも術いもなく、そのことをはっきりと表現しているのは、ムガル王国の始祖、バーブルである。彼がカーブルで得た税収は80万シャールヒ銀貨に過ぎなかったが、狭義のヒンドゥスタン(パンジャブ地方)だけでも、1,300万銀貨、ガンジス河谷からビハールまでを含めた全ヒンドゥスタン(この場合、人口差は勿論もっと巨大になる)では5億2,000万銀貨に上った(『バーブル・ナマ』間野英二訳注、松香堂、1998年、p. 221, p. 468、地域のくくり方はその記述を基にした私の推定)。ヒンドゥスタンの「長所は大きな国、金銀が豊富」なことである(同、p. 467)。

しかしそれにもかかわらず、バーブルにとって、「ヒンドゥスタンは長所の少ない土地」と映った。「人々の中に美しい者は見られない……オモ知力も

ない。礼儀作法もない。寛大さも恵み深さもない。芸術や手仕事においても、整然さや形、縦横のシンメトリカルな線もない。名馬もない。優れた犬もない。ぶどうもメロンも、うまい果物もない。氷もない。冷たい水もない。そして「マドラサもない」のである。雪山地帯のオアシス・遊牧民の感性に合わず、イスラム文化がない。「庭園や建物には人工的な水路がない。また建物には、快適さや自然環境のよさ、秩序や調和がない」。自然を知性で美と心地よい物に変える冴えた腕がないと、彼は見た。そして、死後はカブルの雪山を遥かに見渡す庭園に埋めるよう希望するのである。この気持ちは今のアフガニスタンの人々やその難民も強く抱いているのではなからうか。戦火に破れたふるさとを思う悲しさを、あるいは国内で、あるいは異郷で抱きしめつつ、天国だったアフガニスタンに戻りたい、戻りたいと希望しているに違いない。これは故国への思いではなくて、風土への思いだろう。アフガニスタンの人々にとって、近代的な中央集権国家は縁のないものだった。自分たちの風土の生活圏がほとんどすべてだった。しかし人間らしい生活というのはそうしたものののではないのか。そして、そこに生じる分裂と割拠がグローバルな覇権国家に乗じられることになった。アフガン人の苦渋は世界大の苦渋である。

カイバー峠を下って、円礫台地を過ぎると、ポトワール台地である。ベシャワルからタキシラに到るこの地方は、遥か昔からガンダーラと呼ばれる所である。カイバーキットという小町の入口は立派なアーチの門だが、停車禁止の看板が出ている。わずかに起伏のある平原が続く。次の町ハヤタバードで、トライバル地域が終わる。ここで、同行していた兵士が運転手から200ルピー受け取って降りる。町は近代的な様子になり、断然人が多い。中に、アフガンのブルカ姿も目立つ。手をつないで歩くアフガン人夫婦もいる。奥さんはやはりブルカを被っている。すぐベシャワルの入口にカチャガリ難民キャンプがある。広大な敷地を泥壁の家が埋め尽くしていたそうだが、今はどんどん壊されていて、東端に少し残るに過ぎない。町に入っていくとアフガニスタンとの落差に愕然とする。ベシャワル・イスラム大学とか、パキスタン科学・産業研究所といった建物が、

広い敷地の中に近代的な顔を見せ、鮮やかなサリーをまとった女性が闊歩している。大きなウィンドウにガラスのはまったきれいな店が並ぶ。高いビルが並び、陸橋があり、アスファルト道をたくさんの車が走る。忘れていた大都会である。

パール・コンティネンタルホテルへ2時半過ぎに着いた。このロビーで、ある人と12時半に会う約束をしていたのだが、それらしい人はいない。フロントで訊くと、日本人を探して待っている紳士がいたが、帰ったと言う。無理もない。時差を入れると3時間も遅れたのである。電話をすると、当の相手が出た。平謝りに謝って、お出で頂くようお願いする。待ち時間に、ロビー脇のレストランで昼食となった。ヴァイキング料理だが、またまたアフガニスタンとの落差の大きさに愕然とした。緑と赤のサリーを着た美しいウエイトレスがあり、豪華な料理テーブルがあり、ビールがあり、ワインがあり、各テーブルにはランが飾られている。白い制服を着たウエイターがコーヒー、紅茶を恭しく差し出す。垢じみた男ばかりで、質実剛健を絵に描いたアフガニスタンの食堂と比べると、巨大な無駄と虚飾の世界である。ともかく、原さんとイスラマバード以来のビールで乾杯する。

空腹と乾きがおさまったところで、この落差は何だ、という話になった。表面だけを見ると、アフガニスタンのイスラム的風土と、近代的装飾を被ったインド的風土の対比である。乾燥地のオアシス農業と牧畜を基にしたアフガニスタンのイスラム的風土は、人間と自然の関係が一元的で単純明快、判り易い。近代文明は人間の物的欲望をすべてに君臨させる二元論で、どんなにうわべを飾っても、見え透いている。すこぶる複雑なのは、インド的風土である。その根っこにあるのはヒンドゥー寺院の繁縷なレリーフに反映される混沌とした豊穡さである。その建築デザインや図柄には、パーブルが指摘するように、シンメトリーがない。その世界に断然たるシンメトリー、簡素さ、均整を持ち込んだのは、古代の仏教と近世のムガル帝国である。仏教がインド各地に残した仏塔の簡素さは、混沌たる豊穡さの認識と、それらを絶対空と観る知的なシンメトリーが核になっている。タキシラで見たガンダーラ仏は、簡素さと均整を少し破っているが、まだその範囲内にある。

それに、その都城デザインは碁盤目格子で、ヒンドゥー的都市に比べて、対称性は際立っている。また、ムガル帝国の建築はアグラのタージ・マハール、ファテプル・シークリーに代表されるように、直線的構成とドームの組み合わせが見事な均整を見せている。タージ・マハールは空間的美を凍結している。

しかし、混沌とシンメトリーだけでインド世界の風土は終わらない。もう少し考える必要がありそうだ。釈迦とその弟子たち、ムガル帝国の支配者たち、いずれも中央アジアから西アジアに延びる乾燥帯からの移住者である。そのオアシス農業と牧畜で培われた感性と習俗を、湿潤なインド世界に持ち込んで、混沌とした豊穡さに画然としたメリハリをつけたもの、それが我われの触れるインド的風土になっている。乾燥と湿潤の融合した文化は、古来より続く人間と文化の交流を通して、勿論、釈迦以前から作られてきたに違いなく、その過程の結晶は、ブラフマン、ヴィシュヌ、シヴァの3元構造である。3元構造は3角形となるので、対称性を線で作るより安定している。インドの強みはこの安定した3元3角形で、その上に何であれ受け入れ、おのずと整形してきた。その安定性がアフガニスタンとインド世界の現在の落差を作っている。原さんと取り留めのない話をしながら、こんなことを考えていた。

丁度、飯と話が終わった頃、待ち人が現れた。背が高く、太り気味、少し暗色肌のインド的風貌の紳士である。アフリディさんといい、ペシャワルにある日本総領事館の名誉総領事である。ペシャワルのアフガン難民キャンプを見たいと、安野さんに希望を伝えていて、彼が選んでくれた人である。町を西へ戻って、アフリディさんが連れて行ってくれたのは、町へ入るときに通りが過ぎたカチャガリ難民キャンプである。1979年、ソ連軍の侵攻とともにあふれ出たアフガン難民を収容するため、最初はテントのキャンプが作られたが、そのうち、難民自身が泥壁家を作り、巨大な密集集落ができた。最高時は、4万家族、約20万人が住んだと言う。ザッと見たところ20数ヘクタールの広さに20万人が住む状況を想像するのは難しい。2002年10月に取り壊し始め、西部は平地に戻っているが、東部にはまだ、泥壁家が残りに、相当数の難民も住んでいる。入口付近

や辻つじには難民の作った市場もまだ残っている。土道を奥へ入った突き当たりに簡素な事務所があり、壁に現在の数字があげてある。家族数15,164、人数93,325、戸数5,446、店舗913、手押しポンプ32、深井戸4、学校15、保健所7、男性用集会所70。数字は無機質で、どんな生活がここにあったのか、教えはしない。学校の先生は約300人で、やはり難民である。パキスタン政府が財政援助を行った部分もあるが、キャンプの内部運営は、難民の内から選ばれた21人の長老たちが当たってきたそうだ。男性用集会所はあがっているが、女性だけの部屋はあったのですか、と訊いてみた。勿論、あった、アフガニスタンと同じようにね、との返事だった。どう見ても、一人1メートル四方程度の泥壁キャンプで、どう融通して女性だけの部屋を確保したのか、これも想像するだに難しい。呑み込めない表情に、アフリディさんが言う。ここで生まれ育った子供が24歳になっているのだからね。アフガン難民の厳しい状況を多くの人は知らないし、理解しようもないだろう。パキスタン全体で300万人のアフガン難民がいて、半分は帰還したが、半分はまだ残っている。それなのに、イラク攻撃で予想される難民の方に、人の関心は移っているのだからねえ。最後は怒りと嘆きの調子である。

篤くお礼を述べ、我われはイスラマバードへ向かう。大都会のペシャワルを抜けると、ポトワール台地の農業地帯である。細かく区切った畑に麦が青々と伸びている。しかし、ときに難民キャンプがあり、また、クッチが羊を放牧していたり、アフガニスタンの余韻が残る。ノウシェーラの町でしばらく離れていたカーブル河が左に現れる。砲兵学校とその寄宿舎があり、1965年のインド―パキスタン戦争の際の戦争を記念して、分捕ったインドのタンクが飾ってある。ニッパ・トラヴェルの運転手が、父、叔父、いとこをインド軍に殺されたと、インド非難の演説を始め、さらに、アフガンを攻撃したアメリカがイラク脅迫を始めた、と、反米演説になる。合いの手を入れているうちにアコラコタという小町になる。陸軍士官学校があり、北西辺境州のこの辺りは、軍の施設が目立つ。ついで、ジャハンギラという名の、ムガル帝国に由緒のありそうな町となり、道は大きく右へカーブして、アトックに近づく。左に

広い水面が見え、止まる。広い川原をはさんで、手前にカーブル河、はるか向こうにインダス河が流れ、ここで二つの河が合流する。川岸に岩山が屹立し、今の道はその下を危うく走るが、パープルの頃は、両川の合流点をニーループの渡しと呼び、彼はそこを船で渡河している。

すぐ、インダスに懸かる橋を渡る。渡り終わると岩山が屹立し、そこにアトック城砦がある。ムガル帝国のアクバルが築造したものだと、運転手が言う。その後、台地の所々に石灰岩の丘が立ち、鯨背の尾根にも集落がある。平坦な台地に戻ると麦畑が続く、深い谷が切る崖には、レスの下に、水平層理の砂層が厚い。やがて、ワー・カントンメントを過ぎる。兵器工場があり、家はセメントの2、3階建てが多くなる。国道に車が増え、モーター屋、タイヤ屋など、なじんだ猥雑な風景になる。カントンメントはイギリス時代の英軍駐屯地のことで、インドには無数にある。

前方にタキシラのランドマークである、頂上に塔の立つ岩山が見えてくる。タキシラはイスラマバードに着いた翌日、2月25日に何をおいてもと、訪れた所で、今回の旅の始まりである。言わずと知れたガンダーラ文化の中心都市であった。アケメネス朝ペルシアがガンダーラ地方の首都を置き、アレクサンダー王が軍装を解いて休憩し、アシヨカ王が大学を作り、前2世紀にバクトリア王国(マザリシャリフ付近に前3世紀に建ててられたギリシア人都市)のギリシア人が暮盤目の都市を作り、紀元前後にサカとイラン東北部のパルティア人が占領し、後1世紀にクシャン朝が新たな都市を重ねた。ギリシア彫刻が仏像を生み出し、仏教がアジア全体に広布する基となった都市である。タキシラについて書き始めると、見たことだけでも、大変なことになるので、割愛したのである。しかしひとつだけは書き留めておかねばならない。仏教は森の環境と結びつけて語られることが多い。森の思想だと言う人すらいる。しかし、タキシラ周囲の山は、がらがらの石灰岩の山で、およそ木は生えていない。何千年も昔は森があったかもしれないが、原始仏教がガンダーラで研鑽され始めた頃は、今の状況と変わらないだろう。修業者たちは独房の如き切り石壁の個室の中、石床の上で瞑想し、石床に寝、石壁の食堂で食事をし、

石の城壁で囲まれた城市へ托鉢に行き、道すがらこのがらがらの石灰岩の山を見ながら歩いたに違いない。木は水路沿いに、泉の脇にあっただろう。その水路や泉は、今そうであるように、灌漑用の人工水路であり、それに養われた泉であつただろう。少なくともガンダーラ仏教は森の環境とは縁遠い。それはオアシスの宗教である。日本へ入った仏教は中国で相当変質し、日本でさらに変形し、アニミズムと予定調和的に語られる。日本の仏教は治の時代の安定慣性力を生むにはいいが、乱の時代に突破口を切り開く力を失っている。宗教の本来的な意義を回復するには、仏教がオアシスの宗教として鍛えられたことを噛みしめないと、難しいだろう。

出発地点のイスラマバードはもうすぐである。原さん、このあたりもパシュトゥン・ワリが生きているのでしょうか、と話しかけたが返事がない。窓から入る風に心地よい眠りを誘われていたのは、こちらと同じである。眠気覚ましに、ロンリー・プラネットの『パキスタン』を見ていると、パシュトゥン・ワリの説明があり、四つの要素を挙げている。まず、お客を最大限の歓待でもてなすことである。たとえお尋ね者の犯罪者でも、客として迎えた限り、自らの命を投げ出しても、守る。次に、侮辱や不正義への報復である。発端のほとんどは三つのゼット、かね(ザール)、女(ザーン)、土地(ザミン)をめぐる悶着で、違反者の家族が同村の人びとには数年後でも、報復が加えられる。このため、手の付けられない、血で血を洗う復讐沙汰になるとある。すごい諺が引かれている。「報復は冷たいほどこちよい」と。第三に、敗者は勝者に絶対服従し、へりくだり、許しを乞うて、初めて誇りを回復できるのだそう。最後に、名誉、とくに男は自分の家族、宗族の女性の名誉を守ることが義務であり、しかも、その名誉はよそ者が女性たちを見つめるだけでも、汚されることになる。密通した男女は、女を父が兄弟が殺し、男は父が叔父が殺さない、家族の名誉を回復できない。男女関係をめぐる殺人は復讐を必要としない唯一の例外、とある。女が居るから行くなど制止した男たちは、よそ者が無知のためパシュトゥン・ワリに巻き込まれることから、守ってくれたのだと感謝する気持ちになった。

短い期間だったが、パシュトゥン・ワリは生きて

いると体験させられた旅だった。私の気懸かりは、この社会を相手に、武装解除・動員解除を実施することの危険さである。計画し、実施する人たちが、日本の進路を考え抜き、アフガニスタンの状況を知り尽くして、これ以外にないと、主体的に覚悟を決めて当たるのなら、虎口を切り抜ける道は見つかるかもしれない。しかし、振り当てられた役割だが、何とかなるだろうといった気持ちなら、すぐ見破られて、米英と同様の報復を受ける恐れが大きい。そして、その犠牲が感情的なバネとなって、日本は国民的合意のないまま平和主義から軍国主義の方向へ向かわされそうなのが気懸かりだ。うまく誘い出され、抜き差しならぬ状況に落とされて、うまく嵌め

てやったとCIAに功を誇られたロシアのようにならないことを祈るばかりである。遺跡修復とか、巡回医療とか、教育支援、農業復興支援、住宅復興、衛生環境改善とか、メンタル・ケアなど、民衆レベルで本当に必要とされている平和事業を進めることが、日本としては正道なのではなからうか。

日が暮れた頃、イスラマバードの町に入ってきた。無事帰り着いたという感じを、今回は珍しく持った。短期間だったが、知らなかった世界に触れることができたし、中央アジアとインド世界を考える上で、抜けていた部分を実際に見ることができた。始めようとしているNPOの活動を考える点でも大いに参考になった。感謝したい。